平成３０年度（第５７回）農林水産祭

「明治１５０年記念シンポジウム」

【蚕糸業の新たな展開を目指して】

―業績発表及びディスカッションの内容―

開催日時	平成３０年１２月１７日（月）１３時３０分～１６時
場　　所	ホテルラシーネ新前橋　銀河の間 群馬県前橋市古市町１－３５－１
主　　催	農林水産省・公益財団法人 日本農林漁業振興会

平成３１年３月

公益財団法人 日本農林漁業振興会

発 行 に あ た っ て

農林水産祭事業は、農林水産祭参加表彰行事において農林水産大臣賞を受賞された方の中から特に優秀な農林水産業者を選び、その業績を顕彰し、業績内容について広く普及を図ることを目的の一つとしています。

また、平成３０年は、明治維新から１５０年目に当たることから、国を挙げて様々な記念行事が行われましたが、農林水産祭でも、これに因んだ行事を行うこととなり、明治期に日本の産業を牽引した蚕糸業との関連から、平成２６年度に蚕糸・地域特産部門において天皇杯を受賞した碓氷製糸農業協同組合（現碓氷製糸株式会社）の業績を取り上げて、シンポジウムを開催することとしました。

シンポジウムは、去る平成３０年１２月１７日（月）群馬県前橋市のホテルラシーネにおいて「蚕糸業の新たな展開を目指して」をテーマに、約１３０名の参加の下、実施しました。

このシンポジウムでは、農林水産省農林水産技術会議事務局の島田和彦研究総務官の主催者挨拶と地元群馬県農政部の塚越昭一部長（代読 土屋蚕糸園芸課長）からのご挨拶の後、まず、前農林水産祭中央審査委員会蚕糸・地域特産分科会専門委員の町井博明氏からの選賞審査報告と碓氷製糸株式会社の髙木賢社長から業績発表が行われ、その後、上毛新聞社の藤井浩顧問・論説委員をコーディネータとして、上記のお二方、コメンテーターとして群馬県蚕糸園芸課の土屋真志課長、西尾呉服店の西尾仁志社長、ＪＡ前橋市養蚕連絡協議会の松村哲也会長の３名を加えて、パネルディスカッションが行われました。

本書は、平成３０年度農林水産祭「明治１５０年記念シンポジウム」の業績発表、意見交換（ディスカッション）等の内容を取りまとめたものであり、これらの内容が普及し活用されて、今後の我が国の蚕糸業を含む農林水産業の振興発展に寄与することを願うものです。

最後に、今回開催にあたり、多大なるご支援とご協力をいただきました群馬県並びに一般財団法人大日本蚕糸会の皆様をはじめ、関係各位に対し、深甚なる謝意を表する次第です。

平成３１年３月

公益財団法人　日本農林漁業振興会

平成30年度（第57回）農林水産祭

「明治150年記念シンポジウム」
（蚕糸業の新たな展開を目指して）

目　　次

シンポジウムスケジュール	1　頁
シンポジウム出席者	2　頁
受賞者の業績概要	3　頁
シンポジウムの記録	4　頁

平成３０年度（第５７回）農林水産祭
「明治１５０年記念シンポジウム」
【蚕糸業の新たな展開を目指して】

《スケジュール》

１３：３０～１６:００

（敬称略）

１　開　　会（13：30）
　　公益財団法人日本農林漁業振興会常務理事　　小栗 邦夫

２　挨　　拶　農林水産省農林水産技術会議事務局研究総務官　　島田 和彦
　　群馬県農政部長　　塚越 昭一

３　選賞審査報告　前農林水産祭中央審査委員会農産・蚕糸分科会　　町井 博明
　　専門委員（前農業・食品産業技術総合研究機構顧問）

４　業 績 発 表　平成２６年度蚕糸・地域特産部門天皇杯受賞
　　碓氷製糸農業協同組合（現碓氷製糸株式会社社長）　　髙木　賢

・・・休　　憩（14：30～14：40）・・・

５　パネルディスカッション

・コーディネータ
　藤井　浩（上毛新聞社　顧問・論説委員）
・業績発表者
　髙木　賢（ ４に同じ ）
・コメンテーター
　土屋真志（群馬県農政部蚕糸園芸課長）
　西尾　仁志（有限会社西尾呉服店社長）
　町井　博明（ ３に同じ ）
　松村　哲也（ＪＡ前橋市養蚕連絡協議会会長）

（内容）
・意見交換、質疑応答
・総括

６　閉　　会（16：00）
　　公益財団法人日本農林漁業振興会常務理事　　小栗 邦夫

「明治150年記念シンポジウム」出席者

H30.12.17（敬称略）

区　分	氏　名	所 属 ・ 職 名 等
業績発表者	髙木　賢	平成26年度農林水産祭蚕糸・地域特産部門 天皇杯受賞者　碓氷製糸農業協同組合 （現碓氷製糸株式会社　社長）
選賞審査報告及び コメンテーター	町井　博明	前農研機構・顧問（前農林水産祭中央審査委員会農蚕・蚕糸分科会専門委員）
コーディネーター	藤井　浩	上毛新聞社　顧問・論説委員
コメンテーター	土屋　真志	群馬県農政部蚕糸園芸課長
コメンテーター	西尾　仁志	有限会社西尾呉服店社長
コメンテーター	松村　哲也	JA前橋市養蚕連絡協議会会長
挨　　拶	島田　和彦	農林水産省農林水産技術会議事務局 研究総務官
	塚越　昭一 （代読 土屋 真志）	群馬県農政部長 （群馬県農政部蚕糸園芸課長）
司会・進行	小栗　邦夫	（公財）日本農林漁業振興会　常務理事

蚕糸・地域特産部門

出品財　　経 営（生糸）

碓氷製糸農業協同組合
（代表　高村　育也）

群馬県安中市

1　地域の概要

安中市は、群馬県の西部に位置し、日本三大奇勝の一つである妙義山を望むなど自然、歴史等が豊かな市である。農業は、畜産のほか、平地では稲作、麦作、最近では、とまと、きゅうりなどの施設野菜等の都市近郊農業が営まれ、中山間地域では、うめ、こんにゃく、ねぎ、繭等の生産、加工による付加価値化に取り組むとともに、観光とも結びついた特色ある農業が営まれている。

2　受賞者の取組の経過と経営の現況

碓氷製糸農業協同組合は、昭和34年12月に生糸製造単体経営の農協として設立された組合であり、現在国内唯一の農協組織の生糸製造業者である。また、２つの「蚕糸・絹業提携グループ」の代表として、川上から川下まで一貫した体制を整え、国産繭・生糸の特徴や希少性を活かした純国産絹製品づくりの中核的な役割を担っている。

3　受賞者の特色

（１）国内最大規模を誇る生糸生産と売れる「モノ」づくり

平成25年度の碓氷製糸農協の生糸生産量は約15ｔで、全国の生産量の６割以上を占め、国内最大規模を誇っている。また、売れる「モノ」づくりという観点から、養蚕農家には出荷前選繭（せんけん）の徹底と生糸の原料として差別化された優良繭の生産を指導するとともに、繭の収納量に対応した施設整備を行いながら、生糸生産に取組んでいる。

（２）特徴ある多様な生糸生産

「ぐんま200」、「新小石丸」、「プラチナボーイ」等12以上の蚕品種の繭から普通生糸、太繊度低張力糸（ふとせんどていちょうりょくし）、ネットロウシルクなど６種の異なる繰糸法で蚕品種の特徴を活かした多種多様な生糸を生産し、これらは、中小の工房や製織業のニーズに応じて弾力的に供給され、純国産絹製品の生産・販売を促進している。

（３）川上・川下が連携した蚕糸・絹業の６次産業化

群馬県内をはじめ全国11都県で生産される繭を繰糸し、19の蚕糸・絹業提携グループの生糸生産に携わる一方、自ら「碓氷製糸シルク工房の会」及び「純国産シルクを守る会」の代表として、国産の繭・生糸を使用した「純国産絹製品」の製造・販売に至るまでの蚕糸・絹業の６次産業化の取組を中核となって推進している。

（４）女性の感性を活かした絹製品の企画・開発、販売

女性の感性を活かし、織物業者、製菓会社等と連携しながら、絹を使用したボディータオル、石鹸、靴下のほか、シルクパウダーや桑の実の飴、ジャム等、碓氷製糸オリジナル商品の企画・開発に取組み、年間３千人を超える工場見学者に対する直売や、通信販売等を通じて、知名度の向上と収益確保を図っている。

4　普及性と今後の発展方向

碓氷製糸農協は、全国から繭を収納し、国内最大規模の生糸生産量を誇るとともに、蚕糸・絹業が連携した「純国産絹製品」づくりの川上と川下をつなぐ製糸業者として、今後も我が国の蚕糸・絹業の維持・発展に寄与することが期待される。また、富岡製糸場と絹遺産群の世界文化遺産登録を、蚕糸業に対する理解促進と絹製品の需要拡大の好機として捉え、工場見学者の積極的な受入れやオリジナル製品の販売促進を行うこととしており、蚕糸業の活性化に向けた更なる取組が期待される。

【開会】公益財団法人日本農林漁業振興会　小栗　邦夫

敬称略（以下同じ）

定刻になりましたので、農林水産祭「明治150年記念シンポジウム」を開催いたします。

私は、農林水産祭の事務局を担当しております、日本農林漁業振興会の常務理事の小栗でございます。本日の進行を務めますので、よろしくお願いを申し上げます。

皆様には、師走のお忙しい中、このように多数の方々にお集まりいただきまして、まことにありがとうございます。

この農林水産祭でございますが、昭和37年から開始されました伝統ある事業でございまして、このうち天皇杯をはじめとする表彰事業につきましては、各種コンクールで農林水産大臣賞を受賞しました出品財が年間500ほどございます。その中から厳正な審査を踏まえまして、毎年７部門で天皇杯を授与されているところでございます。

天皇杯というのは、わが国に30ほどございまして、ほとんどがスポーツ関係事業でございますが、農林水産分野には７つの天皇杯をいただいており、ご皇室の農林水産業に対する熱い思いを大変ありがたく思っているところでございます。

天皇杯受賞者の業績を広く普及するために、例年、各地でシンポジウムを実施しておりますが、今年度は、ちょうど明治150年に当たることから、節目の年を記念いたしまして、明治150年間に日本の近代化、あるいは発展に大きく寄与した分野である蚕糸部門にスポットを当てたシンポジウムを企画したものでございます。

このため、平成26年度でございますが、天皇杯を受賞されました碓氷製糸様をお招きして、改めてお話をいただくとともに、また関係業界、あるいは学識経験者の方々も入っていただきまして、意見交換をすることをお願いしたところでございまして、皆様、快くお引き受けいただきまして、ありがとうございます。

近年の蚕糸業を取り巻く状況は、いろいろ厳しい状況もございますが、一方では、バイテク技術を活用した新しい蚕糸の需要であるとか、あるいは、世界文化遺産の登録を契機とした振興でありますとか、新しい芽も生まれているところでございますので、将来の展望が見通せるような話し合いができればと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

それでは、本日は、農林水産省からは、農林水産技術会議事務局の島田研究総務官にご参加いただいております。農林水産省を代表してご挨拶をいただきます。

【挨拶】農林水産省農林水産技術会議事務局研究総務官　島田　和彦

皆様こんにちは。高い席から申しわけございません。農林水産省の農林水産技術会議というところの研究総務官をしております島田でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

平成30年度第57回の農林水産祭「明治150年記念シンポジウム」の、開催に当たりまして、一言ご挨拶を申し上げます。

まず、お忙しい師走の中、皆様にご参加を賜りまして、大変感謝を申し上げたいと思います。また、このような立派なところでシンポジウム開催をできることに、関係の皆様のご助力に御礼を申し上げます。

今回、我が国におきましては、明治改元から150周年という節目、先ほど小栗常務からお話がございましたが、こういう機会にシンポジウムを開きたいということでございまして、特にご当地、蚕糸業につきましては、官営の富岡製糸場における当時の最先端の技術を駆使し、世界最高の生産量を誇ったということもございます。今日のシンポジウムは、「蚕糸業の新たな展開を目指して」と題して、150年たちまして、新たな展開を期待したいと開かせていただくものでございます。

今日は、碓氷製糸株式会社から、最近の状況、そして今後の方向ということでご発表いただき、あわせてまたその後に、パネルディスカッションの形で皆様方の忌憚のないご意見をいただけるということで、私どもとしても大変期待しているところでございます。

農林水産省におきましては、先ほどご紹介もいただきましたが、バイテクに基づきまして、光るシルク、蛍光シルクというもの、それから、非常に細かい、細い繊維を持つシルクというようなものもつくらせていただいております。

それから、最近において、新たなところでございますが、カイコをもとに医薬品を製造しようという動きもございます。こういった動きがこの地域、そして日本の蚕糸業の更なる成長につながっていけばと期待して、今日のシンポジウムを迎えさせていただいております。

ぜひ、今日は皆様方のご意見を拝聴させていただきまして、特に蚕糸業の振興、そして雇用の創出ということを旨として、私ども農林水産省としても支援をさせていただきたいと思っております。

今日は貴重な機会、皆様方にお集まりいただきまして、大変期待しておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

ありがとうございました。（拍手）

○司会　ありがとうございました。

続きまして、今回の開催に当たりましては、地元の群馬県関係者の方々に大変お世話になりました。この場をおかりして、御礼を申し上げます。

本日は、群馬県からは、当初は塚越農政部長にお越しいただく予定でございましたが、県議会最終日でご都合がつかないということでございますので、代理といたしまして、後ほどコメンテーターも務めていただきます蚕糸園芸課の土屋課長にご挨拶をお願いいたします。

【挨拶】群馬県農政部長　塚越 昭一（代読 蚕糸園芸課長 土屋 真志）

ご紹介をいただきました、群馬県農政部蚕糸園芸課長の土屋でございます。農政部長の塚越が議会閉会日ですが、間に合えば、ぜひご挨拶をという予定でおりましたが、残念ながら間に合わないということで、私から代わって農政部長の挨拶をご披露させていただきたいと思います。

平成30年度農林水産祭「明治150年記念シンポジウム」（蚕糸業の新たな展開を目指して）を群馬県で開催いただくに当たり、一言、挨拶を申し上げます。

明治の文豪、徳富蘆花は、群馬の風景を「機の音、製糸の煙、桑の海」と表現しておりますが、群馬県は、世界遺産、「富岡製糸場と絹産業遺産群」に象徴されますように、養蚕・製糸・織物にかかる一連の絹産業が営まれ、特に蚕糸業は明治から昭和にかけて、本県経済の発展や文化の形成に寄与するとともに、我が国の近代化に大きく貢献いたしました。

現在、群馬県の繭生産量は全国の約37％を占めておりますが、外国産生糸、絹製品の輸入等の影響により、蚕糸業は厳しい状況に置かれております。本県では、伝統ある蚕糸業を維持・継承するため、外国産とすみ分けができる群馬県オリジナルの蚕品種を利用した特徴ある繭・生糸の生産、養蚕農家の繭代の価格対策、さらには、新しい産業の創出の取組みである遺伝子組換えカイコの実用化等に向けた施策を展開しております。

本日のシンポジウムで業績の紹介があります碓氷製糸は、国産生糸の約60％を製造する全国一の規模を誇る製糸工場であり、日本の蚕糸業の中核を担っております。昨年５月には、多角的な経営発展を図るべく、農業協同組合から株式会社に組織変更いたしましたが、

県としても、地元の安中市、富岡市、大日本蚕糸会と連携いたしまして、新会社に出資するとともに、高品質の生糸づくりをはじめ、工場見学者の受入れと絹製品の販売強化等に対する支援を行い、総合的な経営基盤強化を支援しております。

本日のご出席の皆様方には、それぞれの立場から今後とも蚕糸業の維持・発展が図れますよう、ご理解、ご協力をお願い申し上げます。

以上、代読でございます。（拍手）

○司会　ありがとうございました。

それでは、これから本題に入ります。

最初に、選賞審査報告を、平成26年当時の中央審査委員会農産・蚕糸分科会の専門委員であられました町井博明様からお願いをいたします。

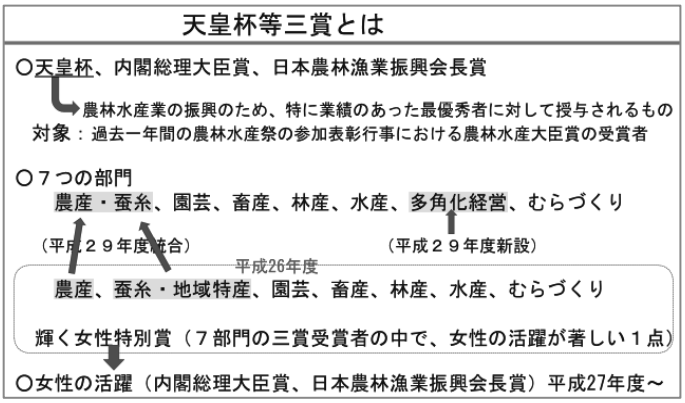
【選賞審査報告】前農林水産祭中央審査委員会農蚕・蚕糸分科会専門委員（前農研機構・顧問）町井　博明

皆様こんにちは。ただいまご紹介いただきました町井と申します。よろしくお願いいたします。

先ほど、ご報告がありましたように、碓氷製糸様が天皇杯を受賞されたのは平成26年です。私は専門委員として、審査の場に立ち会いました。蚕糸分野から天皇杯を受賞するのは、平成10年以来ですので、16年ぶりの快挙に、私自身、非常に感激したことをよく覚えております。

今日は、そのときの話をしてほしいという事務局からのご依頼でしたので、選賞審査報告をご報告させていただきます。

農林水産祭では、天皇杯、内閣総理大臣賞、日本農林漁業振興協会長賞という３つの賞を表彰しております。いずれも過去１年間の農林水産祭の参加表彰行事における農林水産大臣賞を受賞した者を対象としていますので、出品材は、レベルの高いものばかりですが、その中でも、特に業績のあった最優



秀者に対して天皇杯が授与されます。

天皇杯については、現在は、農産・蚕糸、園芸、畜産、林産、水産、多角化経営、むらづくりという７つの部門があります。碓氷製糸様が受賞されました平成26年では、農産、蚕糸・地域特産、園芸、畜産、林産、水産、むらづくりという７つの部門があります。

この年には新たに「輝く女性特別賞」が設けられ、この７つの部門で三賞を受賞した中から、女性の活躍が著しい１点につきまして特別賞が与えられました。この特別賞につきましては、翌年の27年度からは、女性の活躍を表彰しようと趣旨ことで、内閣総理大臣賞、日本農林漁業振興協会長賞が授与されております。

最近では農産物を生産するだけでなくて、加工してさらに付加価値をつけ、それを販売するという、いわゆる６次産業がいろいろな分野で出てくるようになりましたので、そういった分野も新たな制度を設けて表彰しようと、平成29年度に多角化経営部門ができました。これに伴いまして、農産と蚕糸・地域特産の２つの部門が統合され、農産・蚕糸部門となり、現在に至っています。

それでは、平成26年度の蚕糸・地域特産部門の選考について説明します。出品材には、蚕糸以外に、お茶、ホップ、葉たばこ、こんにゃく、いぐさ、い製品、さとうきびなどの分野があります。それぞれの出品材は、農家の方々のような個人、あるいは、農協、ＮＰＯ団体、民間企業などの団体として挙げられてきます。

ご覧の表の通り、出品材は一番の上のお茶が圧倒的に多く、全部で59出品材のうち８割以上がお茶ので占められています。蚕糸からは１点で、ほかの分野からも数点でした。

審査の基準については、まず、先進性で、高い収益を上げているか、土地生産性、あるいは労働生産性が高いか、技術的な革新が行われているか、消費者のニーズに対応しているかなどについて評価。

それから、例えば、高所得性が持続しているか、借金がないかなど財政面からの検討。安定性があるか。経済変動への対応力、

平成２６年度の蚕糸・地域特産部門の選考

対象者：蚕糸・地域特産部門作物別農林水産大臣受賞者
（平成26年度農林水産祭参加行事）

	個人				団体				計
	産物	技術・体場	経営	計	産物	経営	生活	計	
蚕糸						1		1	1
茶	32	6	2	40	9			9	49
ホップ									
葉たばこ	3			3					3
こんにゃく	1	2		3					3
いぐさ	1			1					1
い製品	1			1					1
さとうきび	1			1					1
総計	39	8	2	49	9	1		10	59

審査の基準

経営的・技術的視点から、以下の項目について総合的に評価。

1　先進性
①高収益性　②高生産性　③革新性　④消費者ニーズ対応
⑤製品開発における顕著な成果　⑥困難な状況の克服
⑦明確な群を抜く特徴

2　持続性（安定性）
①収益の持続性　②財政面から見た安定性　③経済変動への対応力
④製品の安全性の確保　⑤環境保全・資源循環　⑥後継者の育成

3　普及性
①全国のモデルケースとなる経営　②地域・業界への波及・貢献
③普及を促すネットワークの構築

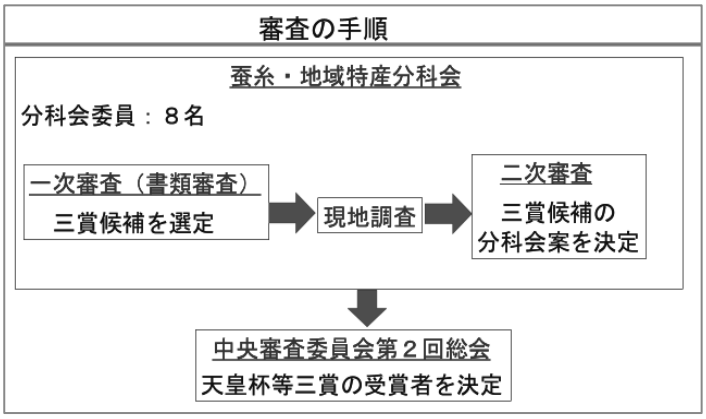
4　時代の要請、経営者の人格
①女性の活躍　②働きやすい環境作り　③明確な経営哲学

環境保全などにも努めているか。農家の場合ですと、後継者の育成に力を入れているか、こういった持続性、安定性についての評価。

それから、普及性として、全国的なモデルのケースとなり得るかどうか、地域や業界への普及・発展に貢献しているか、そういった観点での評価。

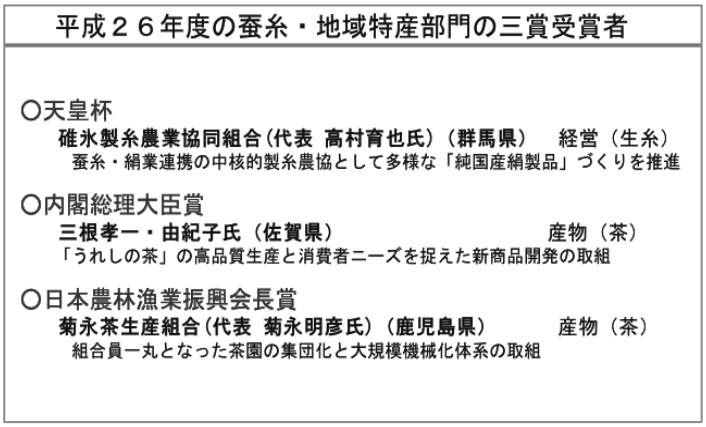
先ほど申しましたように、最近では、女性の活躍、あるいは働きやすい環境づくりに努めているか、そういった時代の要請に対応したこともやっているか。それから、特に経営者については、経営の明確な哲学を持っているか。このように経営的、技術的な観点から、総合的に評価・判断をして、三賞を決めているということでございます。

つぎに、審査の手順ですが、蚕糸・地域特産分科会には合計８名の委員がおります。まず、一次審査で、挙がってくる59点の書類に全部目を通しまして、その中から三賞の候補を選ぶことになります。



基本的には多数決になりますが、三賞の候補を選んだら、現地に赴いて聞き取り調査や現場視察を行い、それをもとに二次審査で天皇杯などの三賞を分科会の案として決定し、最終的には中央審査会の総会に諮って天皇杯等の三賞が決定されます。

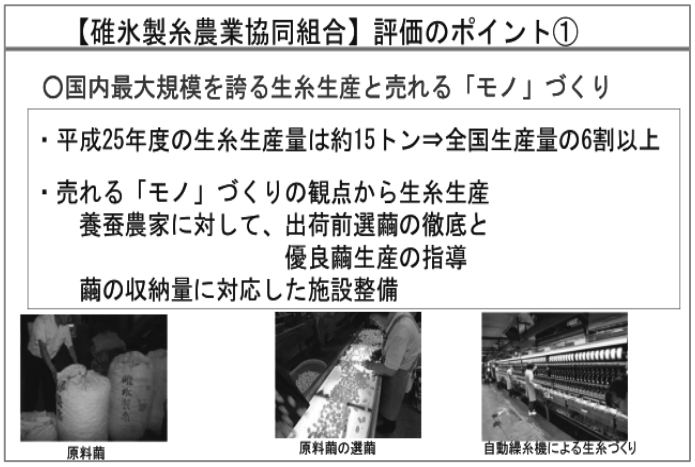
実際に選ばれた方々を紹介しますと、天皇杯は、当時の碓氷製糸農業協同組合で、代表は高村組合長です。一言で言いますと、蚕糸・絹業連携の中核的な製糸農協として多様な「純国産絹製品」づくりを推進していることが高く評価されたものです。



内閣総理大臣賞と日本農林漁業振興協会長賞につきましては、どちらもお茶の分野から選ばれ、内閣総理大臣賞は佐賀県の農家の方が受賞され、日本農林漁業振興協会長賞は、鹿児島県の生産組合の方が受賞されました。

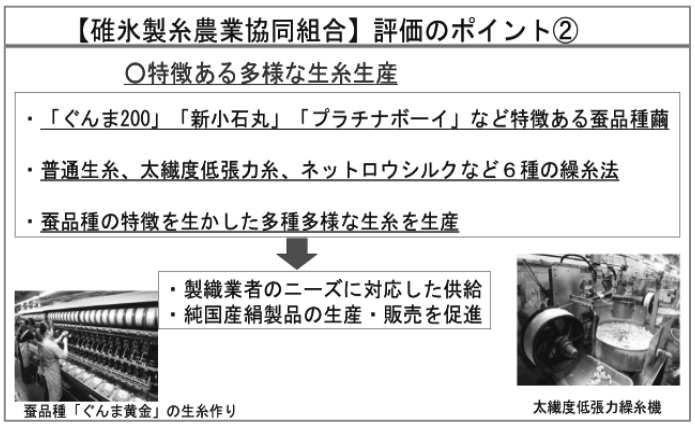
それでは、碓氷製糸農業協同組合様が評価されたポイントを４つ挙げさせていただきます。

まず第１点は、国内最大規模を誇る生糸生産と売れる「モノ」づくりに貢献してきたことです。具体的には、平成25年度の生糸生産量は15ｔありました。これは全国生産量の６割強を占めています。



それから、生糸を生産するに当たり、売れる「モノ」づくりの観点から、養蚕農家に対しては、出荷前の選繭を徹底して、品質のいい優良繭の生産などを指導していることです。また、製糸の効率だけではなくて、繭の収納量に対応した施設の整備にも心がけています。

２点目の評価のポイントは、特徴ある多様な生糸の生産を行っており、特に技術的な面からの評価が高かったものです。群馬県では、群馬オリジナル品種として８品種を奨励していますが、「ぐんま200」とか、皇室ブランドとも言われる「小石丸」の改良版である「新小石丸」などを生産しています。それから、大日本蚕糸会の蚕業技術研究所が開発しました「プラチナボーイ」。これはオスの卵だけが孵化してくるものですが、銀座もとじなどと協力して、男性用の着物などを開発するなど特徴ある蚕品種を用いて生糸生産を行っています。



それから、普通の生糸だけではなくて、低張力で糸を挽いて、太繊度の生糸を生産するとか、ネットロウシルクと言いまして、網目状の生糸を生産するなど、６種類ほどの新しい生糸を生産する装置も導入して、多様な生糸の生産を進めています。

そういった多様な生糸は、製織業者のニーズに応える形で提供され、純国産絹製品の生産・販売に貢献しています。

３つ目のポイントですが、川上から川下まで連携して蚕糸・絹業のいわゆる６次産業化に貢献している点が高く評価されました。これは、碓氷製糸は、群馬県の繭はもちろんですが、群馬県だけでなくて、全国11の都県で生産される繭を受取り、繰糸を行っています。

多くの方はご存じだと思いますが、蚕糸・絹業提携グループと言いまして、平成25年度はこのグループが全部で56ほどありました。その56のグループの中のうち19のグループのつくる生糸の生産を碓氷製糸が担っていました。

【碓氷製糸農業協同組合】評価のポイント③

○川上・川下が連携した蚕糸・絹業の６次産業化

- 群馬県をはじめ全国11都県で生産される繭を繰糸
- 19の蚕糸・絹業提携グループの生糸生産に携わる
- 「碓氷製糸シルク工房の会」と「純国産シルクを守る会」の代表

↓

国産の繭・生糸を使用した「純国産絹製品」の製造・販売に至るまでの蚕糸・絹業の6次産業化の取組の中核として推進

それから、碓氷製糸独自でも「碓氷製糸シルク工房の会」あるいは「純国産シルクを守る会」などの蚕糸提携グループの代表を務めており、「碓氷製糸シルク工房の会」では、群馬県内の50くらいの養蚕農家が入っています。後者は、群馬県はもちろん、群馬県以外の農家の方々も入っている純国産のシルクを生産する会です。

前者で12ｔぐらい、後者で65ｔぐらいの繭、合わせて77ｔの繭が生産されましたが、この２つで全国で生産される繭の45％ほどを占めています。このように碓氷製糸の役割は大きく、提携グループを牽引しています。こういった活動を通じて、国産の繭・生糸を使用した「純国産絹製品」の製造・販売に至るまでの蚕糸・絹業の６次産業化に向けた取組みの中核として碓氷製糸が大きな役割を果たしている点が高く評価されました。

特に、純国産絹製品は、ご承知のように、どこの養蚕農家でカイコを飼育したのか。その製糸はどこで行ったのか、撚糸はどこでやったのか、染色はどこでやったのか、そういう来歴がわかりますので、こういった純国産の絹製品の製造・販売に力を入れて推進していることに対しても高い評価がなされました。

４つ目の評価のポイントですが、ここでの評価は特に女性の活躍を生かした絹製品の企画・開発、販売にも力を入れていることに対してです。生糸の生産には、熟練の繰糸技術が必要ですが、ほとんど女性の方々が繰糸をされており、碓氷製糸におきましても、かなり女性の方々が繰糸を担当されています。もともと絹製品自体が、女性が身につけるものが多いこともあり、碓氷製糸では女性の感性を生かして、織物業者、ある

【碓氷製糸農業協同組合】評価のポイント④

○女性の活躍を生かした絹製品の企画・開発、販売

- 女性の感性を生かし、織物業者、製菓会社等と連携
- 絹を使用したボディータオル、石けん、靴下
  シルクパウダー、桑の実の飴、ジャム等
  （碓氷製糸オリジナル商品）
- 年間3,000人を超える工場見学者に対する直売や通信販売

↓

収益確保と知名度の向上

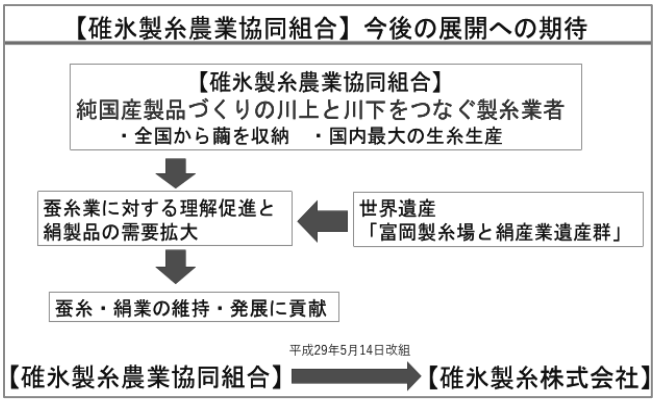
開発された商品

商品の説明をする販売部門の担当責任者

いは製菓会社と連携をしながら、絹を使用したボディタオル、石けん、靴下、シルクパウダー、あるいは桑の実の飴やジャムなど、碓氷製糸ならではのオリジナル商品も開発して販売を進めている点が評価されました。

それから、年間3,000人ぐらいの方々が碓氷製糸の工場を見学に来られるので、そういった方々に対しても、直売とか、店頭販売とか、駅での販売とか、通信販売なども行って、製糸以外での収益の確保や知名度の向上に努めていることが評価されました。

これが最後の図ですが、碓氷製糸農業協同組合の今後の展開への期待でございます。



申し上げましたように、碓氷製糸は全国からの繭を収納し、日本最大の生糸生産を行っていることで、純国産製品づくりの川上と川下をつなぐ製糸業者であることが高く評価されました。

皆様ご存じのように、「富岡製糸場と絹産業遺産群」が平成26年に世界遺産に登録されました。世界遺産施設との連携・協力を生かしながら、一般の方々の蚕糸業に対する理解促進、あるいは絹製品の需要拡大にさらに努めて、蚕糸・絹業の維持・発展に貢献してほしいと委員会としての期待も述べられました。

最後に、皆様ご承知のように、平成29年５月14日に、碓氷製糸農業協同組合は、碓氷製糸株式会社となり、組合製糸から株式会社として製糸事業を行うことになりました。民間企業として今後どのように活動されていくかにつきましては、この後、髙木社長からお話があろうかと思います。

私からは以上でございます。　どうもありがとうございました。（拍手）

○司会　町井様どうもありがとうございました。

次に、業績発表に移ります。

業績発表は、26年度天皇杯受賞、碓氷製糸、現在は株式会社でございますが、株式会社の髙木社長からお願いいたします。

【業績報告】碓氷製糸株式会社社長　髙木　賢

皆さんこんにちは。ご紹介をいただきました碓氷製糸株式会社、代表取締役社長の髙木でございます。今日は大勢のご参加をいただきまして、ありがとうございました。

ただいまは町井さんから選賞の経過について報告がありました。後で申し上げますが、定性的には町井さんに評価していただいた点は続いております。ただ、残念ながら、生産量、販売額等は漸減をしておるのが実態でございます。後ほど詳しく申し上げたいと思います。

工場全景

お手元にパンフレットがありますので、遠くの方でご覧になりにくい方は、それを見ていただきたいと思います。

まず、碓氷製糸は西松井田駅から西南方向に行きまして、徒歩約10分のところにあります。

後ろにあるのが妙義山の白雲山です。来られた方にはすぐわかりますが、山のふもと、それから、工場の向こうには碓氷川が流れて、工場用水を取水しております。

選繭

製糸工程については、ここにおられる皆さんはほとんどご存じだと思いますので、ごく簡単に進めますが、まずは、いただいた繭を、選繭をもう一度工場でいたします。いい繭、悪い繭をふるい分ける。悪い繭をはじくところでございます。

索緒

それから、次が索緒で、まず、繭から糸口を引き出す。その前に煮繭という工程があるのですが、その後、ここで糸口を引き出します。

繰糸

それから、次に繰糸工程に入りまして、ここで自動繰糸機によって糸を挽いています。今ご覧いただいておりますのは、ちょっと前の時代の写真でありまして、今は右側の奥の繰糸機は古くなったので、撤去されています。

右側の手前は、後ほど話題にもなるかもしれませんが、遺伝子組換えカイコから糸を挽く、そのために機械の整備に着手しております。来年の３月までには完成する予定です。

いずれにしても、古い機械を撤去いたしまして、見学者にとっては、見学スペースもできて、いい形になっているかと思います。来年、遺伝子組換えカイコ用の繰糸機の整備が終わりますと、かなり工場内は整備された感じになると思っています。

それから、これは小枠に巻き取られた後の揚返しで、糸がくっつくのを防止して、製品にすぐできる糸の長さといいますか、大きさにする過程でございます。

さらに、それから枠を外して仕上げ過程で、綛（かせ）という一つのものができますが、さらにそれをくくって、括（かつ）というものができるわけです。

最終的な製品はこういう形で出荷をされるということになります。

それから、町井さんの選賞報告にもありましたが、ここはタオルの写真ですが、そのほかに石けんとかローションとか帽子とか、いろいろと絹の製品をつくって、工場内にある販売所、あるいは高崎駅の「いろは」とか、通信販売とか、そういうところでもろもろの販売をしております。

というのがざっとした碓氷製糸のイメージとしてご報告を申し上げたいと思います。

本来の業績の発表に次に移りたいと思います。先ほども申し上げましたが、評価のポイントになりました４つの点、これは引き続き維持されております。

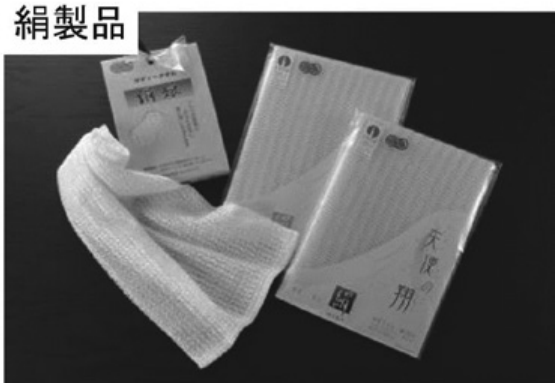
まず、評価のポイントの１つになりました国内

揚返し

仕上げ

製品

絹製品



最大規模を誇る生糸生産量。これは特に資料は用意しておりませんが、全国生産の６割以上は維持されております。ただ、生産量は15ｔから12ｔ程度に減っております。

それから、特徴ある多様な生糸生産が２番目の評価のポイントにありました。これは、まさに「ぐんま200」とか「プラチナボーイ」とか「新小石丸」とか、いろいろやっております。さらに、29年度からは、評価後進展したものといたしまして、６Ａ格の生糸を製造し、販売するようになっています。生糸の品格というのは、今までは５Ａ、４Ａと、とにかくＡが増えるにつれて品質が高い糸ですが、それまでは碓氷製糸では５Ａまでの糸しかつくっておりませんでしたが、26年度からは６Ａの糸をつくり、販売をしております。６Ａは、今までブラジルしかつくっていなかったですが、これを国内でもつくるようになりました。これは、特徴ある生糸の生産を一歩進展させたものと思っています。

それから、３番目の評価のポイントの川上、川下が連携した蚕糸・絹業の６次産業化は、これも引き続きやっております。その後、大日本蚕糸会の方針により、グループの統合をやっておりますが、実質的には継続をしております。

それから、評価のポイント４番目、絹製品の企画・開発、販売ですが、これも先ほど写真で見ていただきましたように、引き続きやっております。

さて、本題の業績の数字に入りたいと思います。

生糸販売額等の推移

	平成 25年	26年	27年	28年	29年
生　糸	147百万円	178	152	129	121
絹製品	37	62	49	35	29
副産物	10	12	12	8	9
営業雑収入	16	23	24	24	26
補助金	71	113	116	129	118
計	278	388	353	325	303

生糸販売額等の推移という表でお示ししておりますが、まず、ざっと見ていただきますと、平成26年がピークであることが、この数年の中で見てとれると思います。生糸の販売額で１億7,800万円でありました。

それから、絹製品も6,200万円。以下、副産物等とありまして３億8,800万円の収入でした。これを26年からずっと見ていただきますと、残念ながら毎年漸減をしている。生糸販売額もそうですし、その下の欄の絹製品を見ても、26年の約半分ぐらいに29年はなっています。副産物というのは、キビソであるとか、サナギであるとか、こういうものですが、これも横ばいからちょっと減っていますね。

営業雑収入は、繭から糸にすることを委託されて加工されたもの、これがメインになっています。これは横ばいからやや増えていますが、全体の収入は減少しております。

この中で補助金が１億円ぐらいずっとあるのです。これだけ何か碓氷製糸の懐に入っているかのように思われますが、これはそうではありません。このうち補助金は大日本蚕糸会の助成金が大部分で、そのほか、群馬県、安中市からもいただいております。大日本蚕糸会の分は、大体は農家の繭代のための補助金でありますので、これは碓氷製糸としてはスルーでありまして、農家に繭代として支払われている。

それから、群馬県、安中市などからいただいている補助金は、例えば、工場内の見学路の整備などの補助金でありますが、これは碓氷製糸の中に資産価値の増加でとどまっておりまして、これは純粋に碓氷製糸の資産増加に寄与している分であります。しかし、多くは繭代として農家に支払われているものでございます。

繭代、労賃等の推移

	平成 25年	26年	27年	28年	29年
繭　代	113 百万円	202	181	152	139
製造労賃	65	63	65	118 (退職金50)	74 (引当金８)
その他経費	60	59	53	57	54
一般管理費	36	38	40	37	41
計	273	362	339	364	308

これに対して、経費はどうなのかと。これも収入とほとんど同じような流れになっていまして、経費の中の最大のものは繭代ですが、２億円からだんだんと減っています。

それから、製造労賃は大体6,000万円ぐらいです。特に、28年に１億1,800万円とガバッとふえていますが、これは、農協から株式会社に転換する際に、従業員は一旦農業協同組合を退職して、それからまた株式会社に再雇用されるという形をとりました。退職金5,000万円が28年に載っているのは、引当金として5,000万円を計上し、実際に退職金が支払われたのは、29年です。

29年に引当金800万円が計上されておりますが、退職金引当金がこれまで積み立てられなかったことにかんがみまして、これからは従業員の安心のために引当金を積むことにいたしましたので、そこで800万円が計上されております。退職金と引当金を引きますと、大体六千数百万円で、ほぼ横ばいでございます。

その他経費は、工場を動かすときの電気代とかですが、これは生産量が減っておりますので、漸減の傾向にあります。

それから、一般管理費、普通の言葉で言えば販売管理費ですが、これもほぼ横ばいということです。

全体として見ますと、３億6,200万円の支出から３億800万円で、これも漸減をしております。

これを先ほどの収入の表と比べていただきますと、退職金以外は、まず、収入・支出が

トントンになっていると言ってよろしいかと思います。そういう意味では、経営的には全体、縮小しているのですが、特別に悪化しているとは数字上出ていません。

こういうふうに販売額が減っているのですが、それは一体、碓氷製糸の我々が何かさぼっていたのかと、こういうことは当然論議になるかと思います。残念ながらなかなか実を結ばないと言えば、そのとおりですが、我々が、我々がというのは、私、社長と田中常務が株式会社になりまして役員になっていろいろと切り回してきましたが、その中で、これまで希薄であった京都方面の生糸問屋とのつながりをつける。それから、大手の絹製品の販売業者、小売り業者であるやまとの会長らと、いろいろと懇談するとか、いろいろなことで需要者側との輪といいますか、つながりをつけてまいりました。特にやまとの会長からは、碓氷の６Ａの生糸は非常にいい、無駄が出ないと、絶賛を受けているわけでございます。

そのほか、碓氷の生糸を使っている問屋とかメーカー、あるいは機屋さんに対して、「碓氷の糸を使ってくれてありがとう」という感謝広告を出したり、あるいは、着物問屋の帛撰（はくせん）というのを有楽町で、その製品の共同展示をするとか、できるだけ需要者との間にベルトをかけるといいますか、つながりをつけることについては、この１年半、株式会社後、かなり力を入れてまいりました。ただ、残念ながらなかなか販売額が伸びないのが実態でございます。

絹織物生産数量等の推移

	絹織物 生産数量	生糸 引渡数量	絹撚糸 輸入数量	絹織物 輸入数量
2005年(暦年)	19,698 (1,000㎡)	26,429 (俵)	32,700 (俵)	15,928 (1,000㎡)
2010年	3,611	13,220	16,306	8,930
2015年	2,316	7,194	14,051	5,468
2017年	2,195	7,554	14,560	4,897
2018年1~6月	1,100	3,213	6,075	2,117

そこで、その背景は何かということでお示ししたのが「絹織物生産数量等の推移」でございます。生糸のお得意さんは、絹織物業者です。絹織物業者の生産量が減れば、生糸を買う量も当然減ります。これは改めて今回のシンポジウムのために、私が大日本蚕糸会が出しております「シルクレポート」の資料編から抜き出したものですが、非常にびっくりいたしました。

さっと見まして、2005年の数字から比べてみますと、激減。たった10年余なのに、激減しております。絹織物の生産数量は１万9,698（1,000㎡）。織物の場合、単位は1,000㎡が一般的です。これが何と2010年には3,611。2017年には2,195で、2005年と2017年を比べますと、国内の絹織物生産量は１割ちょっとしかない。９割減ったという、大変な数字です。

特に2005年と2010年の間に物すごい段差がありますが、これはご案内のように、2008年のリーマンショックという、日本経済、あるいは世界経済が大幅に縮んだ時期を挟んでおります。ここでものすごい段差があります。

その間、生糸引渡数量、これは生糸が機屋さんとか実際に使われるところに引き渡された数量を指しておりまして、国産の生糸と輸入生糸を足したものです。一昔前は、輸入生糸が国産生糸を食って、国産生糸の引渡量が減るという構造だったのですが、これは輸入ものも含めて生糸の引渡数量が減っている。これは国産生糸と輸入生糸の合計の数値でありますから、合計したものが２万6,000俵から、2010年には１万3,000俵、さらに2015年には7,194俵と、かなり減っております。

7,554俵で、2017年は増えているかに見えます。それから、もう一つ、絹撚糸輸入数量があります。これは撚糸にした形で、生糸じゃなくて絹撚糸の形で輸入したものですが、これも３万2,000俵から１万6,000俵と、５年間で半減し、さらに減り続けております。

2015年と2017年を比べますと、やや増えているように見えます。実際増えているのですが、この間、数字を入れ損ねていますが、2016年、平成28年はどうであったかというと、生糸で6,869俵、撚糸で１万2,094俵、2016年はまた引き続き数量が低下しております。2007年になぜ増えたのかというのが一つの問題ですが、これは、最近、2017年には中国産の生糸が急に値上がりいたしました。それまでの２割、３割でなくて、国産生糸との価格競争力の点では、中国産の生糸が上がることは我々から見ればいいのですが、何せ急に上がったものですから、機屋さんがそれに耐えられない。上がる前に、上がる予想が立ったところで、ドッと上がる前の値段で仕入れたのが2017年、平成29年度に生糸引渡数量、あるいは絹撚糸の輸入数量が増えた原因だと見られております。

それが証拠にというほどでもないですが、まだ今年は半年分しか分かっていないのですが、大体この２倍した数字を見てみても、これが２倍、そのとおり今年の前半と後半が同じかどうかわかりませんが、２倍をした数字で見ると、2017年からはかなりそれぞれ落ち込んでおります。

最後に、絹織物輸入数量。絹織物の輸入数量が増えて国産の絹織物を圧迫したのかとなりますと、これもそうとは言えませんで、絹織物輸入数量も同様に落ち込んでいるのが実態でございます。

これから言えることは何かというと、絹需要全体が残念ながら物すごく落ちていることですね。そのさらに原因は何かとなりますが、１つ大きいのは、着物の需要がかなり減退

しているのではないかと推測されます。最近、若い人でも着物ブームということも言われますが、それは同時に、中古品ですね。今までタンスの肥やしだったのが世の中に出回っているのではないか。それが、かなり安い値段で流通しておりまして、新しく着物を買うことをだいぶ食っているのではないかと推測されるわけであります。

ということで、どうも背景に絹織物の生産数量、需要の減退があるということが我々の生糸の製造・販売にとっても大きな悪影響を及ぼしているのではないかと推測されます。まさにここのところを打開しないと、これは蚕糸・絹業全体の展望は拓けてこないと言っても過言ではないかと思います。

富岡製糸場入場者数

平成 25年	26年	27年	28年	29年	30年(1~10月)
31.5 万人	133.8	123.1	83.2	66.2	41.4

それからもう一つ、国民的な絹需要減退の背景があるのですが、これを別の角度から、富岡製糸場の入場者数を見てみます。25年31.5万人から、世界遺産に登録されたのは26年ですね。133万8,000人で、４倍強増えています。それが漸減してきまして、27年、28年、29年、今年は10月までで41万人です。これは11月と12月がありますが、例年、11、12と寒くなると余り人が行きませんので、今年は50万人を下回る可能性が極めて大きいと思います。

これはなぜあえて書いたかというと、国民的な絹の関心が低下してきているあらわれの一つではないかと見られるからです。碓氷製糸について言いますと、絹製品販売額、石けんとかタオルが約半分ぐらいに26年から比べると減っていますが、富岡製糸場に来る方が買ってくれた部分、つまり、富岡製糸場内で売れている部分がかなり減っておりまして、これはもろに富岡製糸場の入場者数と連動している点で、富岡製糸場に何人来るかが、碓氷製糸の絹製品販売にとっても無視できない要素でございます。

それからもう一つ、富岡製糸場に関連するのは、富岡製糸場の繰糸機が動かないものですから、動くものが見たいと、碓氷製糸に見学者さんが来られました。これが26年から3,000人と、先ほど天皇杯の評価のポイントのところに数字が出ていましたが、昨年で言いますと1,700人ぐらいに減っております。つまり、富岡製糸場の入場者数と碓氷製糸の事業の一部がかなり連動している、こういうことが言えるわけでございます。そういう意味で、富岡製糸場の入場者数の減というのは、碓氷製糸にとっては対岸のナントカというわけにはいかない、そういう状況にございます。

総括でございます。

確氷製糸の主力事業である生糸販売量というものは、残念ながら減退をしております。その中では、29年度から６Ａ生糸を実際の製造・販売に乗り出しました。これは根強い需要があります。例えば、先ほどから言っていますやまとさん、日本で最大の小売店チェーンですね。年間売上額が200億円のやまとなどから根強い需要がありますし、京都の着物問屋のソーホーも６Ａ生糸を使って製品を売っておられ、一部には根強い需要はあります。しかし、量的な広がりはまだでありまして、そういう点で需要、もう一つの柱にはなりますが、完全にカバーし切れてはいない。

総括

- 確氷製糸の主力事業である生糸販売量は減退している。
- ６A生糸について根強い需要はあるが、量的なひろがりはまだ。
- 背景は、絹織物需要(きもの)の減退。絹織物生産の減として現れている。これが大きく影響。
- また、多品種少量生産の傾向が進む。
- それだけに、容易ではない状況。
- 現状では、生糸商等関係者の協力を得つつ、個別の需要者に向けてのアプローチを積み重ねていく以外にない。
- 群馬県の絹関係業者に期待するところは大きい。
- 富岡製糸場の入場者は減り、一時のブームは去りつつある。オリンピックは、どう作用するか。
- 絹製品については、記念品需要の拡大と販売場所、販売機会の増加を図っていく。

背景に何があるかというと、やはりこれは絹織物需要、つまり、着物の減退ですね。これは日本の生糸については、それから、日本の機屋さんにとっては非常に大きな影響がある。どこにそのメルクマールがあるのだと言われれば、端的に言えば、私は、絹織物の生産量の減だと。これが現象としてあらわれてきたと思います。これが生糸の販売にも大きく影響している。それだけに、背景がそういうきつい背景なものですから、容易でない状況であります。

なお、念のためですが、副産物であるキビソとかサナギ、こういうものは非常に好調に売れておりますが、全体にそれほど単価の高いものではありませんので、収益改善には寄与しておりますが、これでバンザイ三唱というものではございません。やはり本命の生糸、これについてどうするかが最大の課題でありまして、現状ではなかなか一発ホームランはありませんので、生糸商、非常に大きく生糸を買ってもらっていますが、こういう人の協力を得ながら、個別の需要者に向けてアプローチを積み重ねていく以外にはないのではないか。

それからまた、群馬県の絹関係者にも大いに確氷製糸のものを使っていただいておりますが、さらに群馬県の関係の方に期待するところは大きいと思っています。

そこで、たまたまといいますか、農林水産省の補助事業で、地域作物の需要創出事業というのがあります。これは、絹製品、つまり、新しい斬新なものをつくれば、その試作費について補助する補助事業があります。これを何とか群馬県の、あるいはその他の関係者

の参加を得て、試作をいろいろな面で試みる、やっていくという補助事業について取り組んでいき、一つの突破口にしたいと考えております。

これは、いろいろなところでそういう新しい製品をつくろうという方はおられます。例えば、株式会社ロマンシルクという会社がございますが、ここでは、女性の肌着を開発しようと企画していらっしゃるようですが、こういう企業と連携して試作をすることも一つ事業拡大の大きな方策ではないか。

いずれにしても、一発ホームランはなかなかありませんので、いろいろな面でそれぞれ事業創出、事業拡大の目を育てていく、こういうことをこれからやっていきたいと思います。

遺伝子組換えカイコを使った生糸も先ほど工場整備の中で申し上げましたが、これも来年度から機械の整備が終われば、実際の生産の段階ですので、これも直ちに大ホームランには多分ならないと思いますが、一つの柱として取り組んでいきたいと思っています。

富岡製糸場については、先ほども申し上げましたように、入場者数は減っておりまして、一時のブームは去っているのではないか。これに匹敵する行事は何かということを考えますと、オリンピックが当面考えられるわけですが、これは一体どのように活用できるかが一つの大きなこれからの課題であろうと思います。

それから、絹需要。碓氷製糸の収入源の一つでありました絹製品ですね。これはピーク時から半減をしておりますが、１つは記念品事業の拡大。例えば、ナントカ大会。群馬県では近々土地改良大会があります。そうすると、全国から人が集まってくる。そういうときに記念品として碓氷の絹製品をご活用いただけないか、あるいは、販売場所をさらに拡大する、あるいは販売機会の増加、今、高崎駅のコンコースで月に１回販売をしております。そのほか、ネット販売を含めて、いろいろと販売機会の増加を図っていく必要があるのではないか。

ということで、はなはだ地道なことでありますが、小さな柱でも積み重ねていく、バントヒットでも何でも塁に出ることをやっていく以外に、当面、なかなか方策はないのが実態であろうと思います。

以上、簡単ではございますが、碓氷製糸が今どういうことで苦闘しているか。その背景は何だろうかについて、ご報告申し上げました。本当は、天皇杯をもらって３年、４年、もっと前途洋々と前進をしているという報告ができれば非常にいいのですが、残念ながら実態はそうなってはいない。しかし、それで終わるわけにはいきませんので、必死で頑張

っていることを申し上げて、ご報告とさせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。（拍手）

○司会　髙木社長ありがとうございました。

ご質問などあろうかと思いますが、パネルディスカッションの中で会場とのやりとりの時間もございますので、そちらでお願いをいたします。

それでは、ここで10分間ほど休憩といたします。14時40分に再開といたしますので、それまでにご着席をお願いいたします。

（　休　憩　）

○司会　それでは、再開いたします。

これからはパネルディスカッションでございます。

進行は、コーディネータとして上毛新聞社の顧問・論説委員の藤井様にお願いをいたします。

【パネルディスカッション】

コーディネータ　上毛新聞社　顧問・論説委員　藤井　浩

○藤井（コーディネータ）　それでは、パネルディスカッションを始めさせていただきます。

司会進行を務めます上毛新聞社の藤井と申します。どうぞよろしくお願いします。

本日のテーマは、「絹産業の新たな展開を目指して」です。さらにもう一つテーマがあります。「明治150年記念シンポジウム」ということです。幕末明治からの日本の近代化を支えたのが絹産業でした。その歴史を踏まえて、過去の150年とともに、これから100年、200年先、未来を展望したい。未来の絹産業どうなっているか、どうあるべきか、そういうことについても、皆さんにお聞きできればと思います。

具体的には、日本の絹産業の最後の砦であり、日本の絹産業の扇の要とも言える碓氷製糸の業績に対するご意見をお伺いしてから、蚕糸業の現状や課題について、皆さんにいろいろな角度からお聞きしていきたいと思います。

2014年に「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界遺産に登録されました。それから５年た

って、いろいろな変化があらわれています。登録に伴って、絹文化への関心が飛躍的に高まりました。それによって、絹産業をめぐる環境にも大きな変化が生まれています。遺伝子組換え技術を使った繭生産など、新たな取り組みも始まっています。そうした動きを捉えて、「蚕業革命」という言葉も使われています。

ただ、実態はどうなのか。今、髙木さんのお話にありましたが、決して明るいばかりではありません。絹産業をめぐる環境は確実に変化したのですが、決して楽観できるような状態にはなっていないと言えると思います。そんな現実を踏まえて、新しい取り組み、これからの可能性について、率直なご意見を伺いたいと思います。

髙木さんと町井さんには先ほどお話をいただきましたので、今日、パネリストとしてご意見を交わしていただきますお三方に、まず自己紹介をしていただきたいと思います。一番こちら側の土屋さんからお願いいたします。

○土屋（コメンテーター）　蚕糸園芸課長の土屋と申します。先ほどはご挨拶をさせていただきまして、ありがとうございました。

私ですが、ここ地元前橋市の旧宮城村というところで、米麦、養蚕、そして酪農を営む農家の長男として生まれました。大学で農学部（養蚕学研究室）を卒業いたしまして、世界遺産になりました高山社に例えますと、養蚕教師と言うのでしょうか、養蚕の専門家として群馬県庁に入りました。

最初の10年間は、当時、蚕業事務所というところがありまして、県内各地で養蚕の指導に当たりました。就職した１年目が碓氷安中の担当でありまして、碓氷製糸農業協同組合があったり、まだ、当時は小竹協業養蚕組合があり、碓氷製糸の組合長を長くやった茂木さんがこの組合の組合長もやっていました。また、松井田町にはＪＡの稚蚕人工飼育センターがあって、そちらの指導も行いました。ただ、１年目ということもあったので、先輩についていったような状況ではありますが、そこから私はスタートいたしました。

その後に多野藤岡の担当として、当時、稚蚕人工飼料育センターを県内各地に新設するという状況の中で、吉井町の東部稚蚕人工飼料育センターの建設にかかわり、泊まり込みでおカイコを飼ったのを覚えております。

その後に異動いたしまして、勢多前橋の担当で、今日見えています芳賀の糸井さんであったり、宮城の前原さんであったり、パネラーの松村さんであったり、養蚕の担当として養蚕の新しい技術や人工飼料育等の指導でかかわらせていただいておりました。

その後、県庁の蚕糸課に異動し、今日話題になりましたが、「ぐんまシルク」のブラン

ド化で、これから群馬県の蚕糸業がどうなるのかという危機感の中で、川上から川下まで連携した、付加価値の高い蚕糸業を展開しようとしました。この取組の中で、県立日本絹の里の建設・運営とか、絹の染色工芸展の開催準備等の担当をさせていただきました。

その後、流通園芸課というところで花や野菜、園芸振興等を担当した後に、縁あって、ブラジル・アマゾンでＪＩＣＡの専門家として「東部アマゾン森林保全・環境教育プロジェクト」のチーフアドバイザーを2年間やらせていただきました。

日本に戻ってからは、６年間、世界遺産の担当係長として、本日のコーディネータの藤井さんや伝道師協会の皆様と一緒に仕事をさせていただきました。

その後に農畜産物振興の担当係長として、農畜産物輸出を手がけました。更に群馬県上海事務所の所長で３年間お世話になりました。中国駐在中に杭州にあります国立シルク博物館とか、蘇州シルク博物館とか、蘇州シルク協会、蘇州大学等々、先輩たちとのつながりを上海事務所長としてもつないできたつもりであります。

そして、この４月からは蚕糸園芸課長で本県蚕糸業の担当課長ということでお世話になっていますが、以上のように県庁に入ってからこれまで直接的、間接的に常に蚕糸業振興を胸に置いて仕事をしてきたつもりでおります。

○藤井（コーディネータ）　蚕糸業振興に関する行政の最前線にいる土屋さんから、後でまた県の施策についてじっくりお話をお聞きしていきます。

続いて、西尾さん、お願いします。

○西尾（コメンテーター）　西尾と申します。市内で着物の小売業をしています。今日、このように専門家の方ばかりお集まりの場で、いささか戸惑っております。

ご存じのように、前橋は、繭と生糸で栄えたまちです。その繁盛ぶりは、今私たちが想像する以上のものであったのじゃないかと思います。私の父の実家も製糸業でした。西尾製糸と申しました。明治から３代続く製糸家でした。前橋では、中規模程度の工場であったようです。玉糸製糸が150釜、自動繰糸機が８台、従業員も100人以上いたようです。私の記憶の中では、広い体育館のような倉庫に繭が天井まで積み上げられていたこと、また、工場をのぞくと、湯気の中で工女さんたちがしきりに糸を挽いていたことが印象に残っております。

その西尾製糸も、昭和46年のいわゆるドルショックのときに倒産を余儀なくされました。そのときの惨状は、今でも強い印象として残っております。この時期に前橋の製糸は、撚糸もそうでしたが、かなりの数やめていった記憶があります。

私は、呉服屋で着物を取り扱っています。その扱う着物のほとんどが絹です。今日まで着物が日常性を失っても存続し得たのはなぜかというと、絹文化、日本人の絹に対しての特別な思い入れがあったからではないかと思います。絹が特別な存在であって、それが私たちの中に根づいていたのだと思います。先ほど、絹製品、絹織物の生産の減少を髙木さんからお聞きしましたが、まさにだんだんそういう絹に対しての意識が薄れていっているような気がいたします。

そんな記憶の中の絹と着物に代表される絹文化から、絹にかかわる活動をしております。そのことについては、次の機会にお話しさせていただきます。

○藤井（コーディネータ）　では、続いて、松村さん、お願いします。

○松村（コメンテーター）　座ったままで失礼します。

私は、ＪＡ前橋市養蚕連絡協議会会長の松村哲也と言います。今日はこういう壇上に上がって話をすることを最初受けたときは、こういう大勢の前で話をするのがちょっと苦手なので、話があちこち飛んだり、追いつかないところもあるかとは思いますが、私は個人的には、養蚕農家の一人として、今日、意見を述べさせていただきたいと思います。

私は、前橋市は東大室町という国道50号線を桐生へ向かいまして、赤堀町という町があるのですが、これは伊勢崎市ですが、その伊勢崎市と前橋市のちょうど境界付近ですね。そこの50号から北へ数百メートル入ったところでカイコを飼っています。

実際にカイコを飼っているのは自宅では４齢まで。壮蚕期は、そこから２～３分行った高い丘の上でパイプハウスを使って壮蚕期だけそこで飼っています。ですから、カイコは４齢休み、起き始めると、パイプハウスへ持っていき、上蔟のときには家へまたカイコだけを持ってきて、２階の上蔟室で繭をつくらせる、そういう方法でカイコを飼っている一人です。

それからもう一つ、皆さんの資料の中には載っていないのですが、前橋遺伝子組換えカイコ飼育組合、遺伝子組換えカイコの組織の組合長も兼任しております。昨年と今年、２年にわたって、世間の注目を浴びました緑色に光る蛍光絹糸、緑色蛍光絹糸、これをつくるカイコ、これを前橋市内で養蚕農家が生産をしたというニュースが大変脚光を浴びているわけですが、この話も後ほどちょっとしてみたいと思います。

○藤井（コーディネータ）　ありがとうございました。

続いて、最初にお話をいただきましたお二人に質問させていただきます。

町井さんからは選賞審査報告をしていただきました。天皇杯を受賞したのは４年前、

2014年のことですね。その後、碓氷製糸の経過は、髙木さんからもお話がありました。大変苦闘されている。ただし、昨年、株式会社になって、これから大きな飛躍を図ろうとしているところですが、選賞審査をしたときは、まだ民間になる前、組合だったのですが、民間になってからの碓氷製糸にどのような期待をもたれますか。

○町井（コメンテーター）　日本の繭の６割以上を碓氷製糸さんが繰糸されている現実は今も変わらないということで、それに対する期待は非常に大きいと思っています。先ほど、６Ａ格の生糸もできるようになったとお話がございました。これは非常に大きなメリットがあるだろうと思っております。

先日、フランスの企業の方と話をする機会がありました。ブラタクの生糸を購入して使っているとのことでしたので、なぜブラタクかと聞くと、ブラタクの生糸はトレーサビリティがはっきりしているということでした。トレーサビリティと聞いて思うのは、大日本蚕糸会が蚕糸・絹業提携システムの中で進めている純国産生糸ですね。これはまさにトレーサビリティがはっきりしている。蚕はどこの養蚕農家で飼育されたか、製糸はどこでやって、染色はどこでやったかなどその履歴がはっきりわかるわけですね。純国産生糸にはこういった魅力がある。これは、国内だけじゃなくて、海外から見たときも非常に注目されることだと思いました。

ですから、民間企業になられた碓氷製糸さんにとっては打って出るチャンスでもあると思います。６Ａ格ができたことと同時に、トレーサビリティがはっきりしている純国産生糸を武器にヨーロッパやアメリカなど海外に打って出るという選択肢もあり、今後に期待したいと思います。

○藤井（コーディネータ）　髙木さんからは先ほど具体的な数字を示していただきました。後でまた蚕糸業全体のことをお話いただきますが、その前に、今日は、まずは髙木さんからぜひお聞きしたいことが１つありました。

髙木さんについては、皆さんご存じだと思うのですが、高崎の出身で、農水省でいろいろな仕事をされてきました。1984年に農林水産省の繭糸課長になられて、1996年には農産園芸局長、さらには、2005年から10年間、大日本蚕糸会の会頭を務められました。この経歴を見て、一貫して蚕糸業の振興に尽力されてきたことがわかります。そんな方が、昨年碓氷製糸の社長になられた。非常に頼もしい方だと思うのですが、髙木さんのお立場、今までの経歴、碓氷製糸の状況を考えると、大変な決断が必要であったのではないかなと思います。なぜ、この時期に碓氷製糸の社長になろうと考えたのか、その決断を最初にお聞

かせください。

○髙木（業績発表者）　今、藤井さんからお話がありましたように、群馬県高崎市の出身だというのが一つあり、また、1984年ですから、今から34年前に蚕糸担当の課長になってから、一貫して蚕糸業の振興というのはテーマでありました。特に私は、蚕糸・絹業の中で、要をなすのは製糸業であると。つまり、養蚕農家から織物を織る機屋さんの間にあって、中核的役割を担っているのが製糸業だと思っておりました。30年以上前からそうです。

ところが、残念ながら全国の製糸業者が多く廃業になってしまいまして、残る碓氷製糸は何とか存続させて、日本の蚕糸業の核として残さなければいかんと思っていたのですが、残念ながら農協時代は、当時の組合長、体の具合がよくないこともありまして、何とか長期存続を考えるというよりは、ある程度やったら、そこまででやめるのもやむを得ないと、そういうお考えであったように受けとめました。

これではいかんというので、協同組合で限界があるなら、株式会社にする。会社といっても、単に営利会社ということでなくて、地域の皆さんの支持を得た会社にしなければいかんと、群馬県庁、安中市、富岡市などにも随分足を運びまして、一種の共同会社的なものですね。結局、群馬県さん、安中市、富岡市に出資を仰ぎ、地元ではＪＡ碓氷安中、さらには大日本蚕糸会と、この５者が大手の株主なんですが、こういったかなり公共的性格を帯びた会社に農業協同組合を転換させることで、平成27年以来、水面下で活動をしてまいりました。

その結果、そういう方向にはなったのですが、さて、じゃ、誰が社長になるのだと。こういう当然議論になりまして、今までのいきさつもあり、結局私自身が社長をやるしかない、求心力と言うとおこがましいのですが、これを引き受けることにしたということで、長期にわたって碓氷製糸が日本の蚕糸業の核として頑張る、そういう体制をつくりたいということで引き受けたのが経過です。

○藤井（コーディネータ）　絹の国群馬を維持・発展させようという強い使命感と責任感を持ち、決断をしたというお話しでした。すばらしいことだと思います。これを踏まえてお三方にお聞きします。碓氷製糸に対して、碓氷製糸の業績に対して、どのように捉えていらっしゃるのか、また、これからいろいろな課題を抱えていますが、どのような運営、経営をしていったらよいか、ご意見、ご提言をいただきたいと思います。土屋さんからお願いします。

○土屋（コメンテーター）　碓氷製糸ですが、現状についてのお話は、髙木社長からあり

ましたので、ちょっとひもといて、碓氷製糸ができた昭和34年のお話から少しコメントをさせていただきたいと思います。

ご案内のとおり、製糸業は、生きる死ぬと書いて生死業だというような方がいるように、国際商品ということもありまして、相場が上下し、歴史的にいろいろな方々がその相場に右往左往する状況がありました。私が吉井町の担当をしたときに、当時の吉井町農協の組合長から、昭和33年は蚕糸業にとっては大混乱の大風が吹いて、繭を引き売りするなど大変な年だったと聞いた記憶が蘇りました。

ご案内のとおり、碓氷製糸は昭和34年に設立されたので、地元の民間製糸工場の撤退等もあったと聞いておりますので、農家が本当に困って、何とかしてくれというときに立ち上がったのが碓氷製糸農業協同組合だったのだろうなと思っています。ですから、碓氷製糸の脈々と流れるＤＮＡの中には、「養蚕農家の、養蚕農家による、養蚕農家のための組合」という理想があると思っています。群馬県の、そして日本のと言ってもいいかもしれませんが、碓氷製糸がなければ、今の蚕糸業の存続自体、私はなかったと、その点からも確信をしています。

平成29年に、社長が言われるように株式会社化をされました。碓氷製糸にとっても、そして、一緒に出資をした県や市町村にとっても、農協にとっても、設立当時の思いが引き継がれていて、これからも養蚕農家のために、その魂が引き継いでいかれることを期待したいと思います。

私も髙木社長が就任されたニュースを見て、この人しかいないなと思いましたし、ちょうど昨日『西郷どん』もありましたが、明治の西郷隆盛のように、現在の蚕糸業を担っている人材は、日本中でこの人しかいなかったと思っております。

私が以前、蚕糸課にいた当時は、まだ営業製糸もありましたが、組合製糸で中心となったのは碓氷製糸でした。県としましても、新しいオリジナル品種をつくったり、人工飼料センターをつくって、農家が安心してカイコを飼えるようにと、蚕種や餌の供給をやってきました。

売る方の話ですが、県立「日本絹の里」というのが高崎にありますが、形になる前は、群馬シルク会館という仮称で検討されていたのですが、碓氷製糸や養蚕・製糸の方々と話す中では、これからは川上から川下まで連携をし、是非絹製品をＰＲし、売っていく拠点にもなるような展示施設が欲しいということがありまして、「日本絹の里」をつくって群馬県の生糸を、そして、それからできた絹製品を売ろうということで、関係者が一致団結

をして取り組んできたのです。

また、世界遺産の取組みですが、最近の入場者が減少した話は、私も承知はしていますが、富岡製糸場を世界遺産にしようと始めたときには、年間2,000人ぐらいが、富岡製糸場の写生大会のときしか入れない施設でした。富岡製糸場の世界遺産登録が実現したことで多いときには133万人の方が来たのです。

入場者の減少対策として、今後の取組みの中で、私も含め、川下から川上までの関係者がもう一度知恵を出し合って、碓氷製糸、そして群馬県に残った養蚕農家を盛り立てるような取組みができればなと思っております。養蚕農家から絹業者までだけではなくて、日本の絹文化、最終的には国民、県民の方が支えていただかないと思っております。物を売って産業として残す中では、ぜひもう一度消費者の方々に響くような取組みを、碓氷製糸とともに県としてもしっかりと取り組んでいきたいなと思います。

数年前の私の娘の成人式のときには、ほとんどの新成人の女性は、着物を着ていました。国民の絹に対する、また絹文化に対する憧れというものは、今でも生きていると思っています。だからこそ、ここをうまく、もっともっと訴求するような取組みを強めていけば、まだまだ我が国の蚕糸業を再生できる可能性があると思っております。

また、繰り返しになりますが、世界遺産「富岡製糸場と絹産業遺産群」がありますので、世界遺産の取組みとともに、この日本の先人たちが叡知と誇り、そしてまたこの絹文化を支えてきた絹にかかる歴史遺産が多数ありますので、これらを活かして新しい展開ができればと思っております。

○藤井（コーディネータ）　ありがとうございました。

続いて、西尾さんにお聞きします。西尾さんは呉服店を経営される中、「絹の会」という大変すばらしい会を続け、碓氷製糸とも深くかかわってこられました。そうした活動を見ていて、すばらしいと感じるのは、自分の仕事の枠を超えた活動をされていることです。そんな西尾さんは、碓氷製糸に対してどのように受けとめていらっしゃいますか。また、どんな期待を抱いているでしょうか。

○西尾（コメンテーター）　私は「絹の会」の活動について、ちょっとご紹介させていただきたいと思います。

今から二十数年前ですが、私は、自らが扱う着物は、国産の糸でできていると思っていました。今でこそ国産糸の割合が0.2%とも0.3%とも言われていますが、まだ少しその比率は高かった時代ではないかと思います。私共の扱っている絹のほとんどが中国糸であっ

たり、ブラジル産のものであったりということで、大変衝撃を受けました。そのことについていろいろな方にお話をお聞きしたりもしました。取引のある丹後や長浜の機屋さんにお尋ねしました。すると、その答えは、ほぼ異口同音に、品質において扱えないのだとのお話でした。特に、白生地の産地では、経糸には全く使えるものではないと、経糸はブラジルの糸だけだということを聞きました。

なぜ品質がそんなに劣るのか。かつて、ロンドンやミラノにおいて、前橋というブランドでその品質が高く評価され、世界を席巻した糸もあった。そんな国産のものがなぜだめなんだろうか。そんな疑問を持ちました。

そこで、平成14年に、県やＪＡ、碓氷製糸や繭生産の方々の協力を得て、特定の農家の繭を買い受けて、それを碓氷製糸で生挽きで挽いていただき、糸をつくりました。このことは取り立てて特別なことではありませんが、過去にはそのようなことがいろいろな法律によってできないということでした。そこで、生産された良質な糸を、それを必要とする人たちに供給できれば、それが一つの国産糸のＰＲになるのではないかと思いました。

当初、私どもでそれを白生地にしたりもしておりましたが、白生地というのは、強い撚糸をかけますので、糸を生かすという意味では、非常にもったいないということで、染色工芸作家、作家活動として染色を行う人たちにあっせんする活動を15年前から行っております。当初は、そんなに需要もなかったわけですが、いろいろなところから聞かれて、ご注文があります。ただ供給するだけでなく、「絹の会」では、その糸を生かす撚糸や精練などの勉強会や情報交換なども行ってきました。よい糸は、生糸だけではなくて、精練と撚糸によって決められるわけですが、そんな研究もしております。

この活動は、平成18年から始まりました蚕糸・絹業提携支援の事業と同じような内容ではないかと思います。現在、この活動に賛同する主な染色家たちは、40名ぐらいいます。春は「ぐんま200」を生繰りにして、晩秋は同じく「ぐんま200」の糸を塩漬けにした後に繰糸した糸を、碓氷製糸のご協力のもと、生産していただいています。わずかな量でございますし、特に塩蔵の糸などは大変な手間もかかるものですが、それをやっていただいています。国産糸の需要を喚起するためには、最高品質の糸をつくっていくことが不可欠ではないかということから、そんな活動をしております。

○藤井（コーディネータ）　続けて、松村さんには、養蚕農家の立場で、碓氷製糸に対する思いを語っていただきたいのですが、松村さんが会長を務められています前橋市農協養蚕連絡協議会が2016年に蚕糸・絹業提携確立技術・経営コンクールで最高賞の農林水産大

臣賞を受賞しています。松村さんご自身も長く蚕糸・絹業連携グループでいろいろな実績を残しています。そうした立場で碓氷製糸に対する思いを語っていただけますか。

○松村（コメンテーター）　私は、個人的にカイコを始めまして45年ほどたちます。連絡協議会の会長を受けてからはまだ数年でして、まだ短いのです。これまでは、養蚕連絡協議会の繭は、当時から我々が農林水産大臣賞を受けた平成28年、その当時にも碓氷さんには行っていました。でも、正直なところ、私は、その頃は、蚕糸の提携システムですみ分けする頃までは、碓氷製糸さんは余り頭にはなかったのですね。というのは、最初の頃、農協が合併を２度ほど繰り返しまして、最初に合併した前橋市農協の頃は、経済連がありました。今の全農ですよね。その経済連に一旦は全て繭の配分、どこの製糸へどのくらい売るかを任せていて、その後、提携システムができてからは、農協の第２回の合併で、全量を農協が碓氷製糸さんに売り渡す、そういう経過をたどってきました。

その頃になって初めて碓氷製糸さんというのを意識し、碓氷製糸さんは、先ほども説明がありましたが、最初はずっと組合製糸で存続してきたわけです。それがだんだん不景気になってきて、組合の組織を維持できなくなる。そういうことで問題になって、それではということで株式に移行してきたわけです。これまで、組合組織としてよく製糸会社がここまでもってきたなと、それだけは感心しております。なぜそんなに持ちこたえることができたのかと不思議でならないです。ちまたでは、株式会社という煙突を掲げて糸を挽く、そういう製糸会社がほとんどでした。私が最初、養蚕を始めた頃も、そういう個人の株式会社に繭を売っていました。そういう関係上、私は株式会社と聞くと、本当に信用できて、つぶれないのかな、そんなことがいつも頭をよぎります。

でも、先ほど髙木さんから説明のあった中で、この株式会社に移行した株主というのは、安心できる株主で、県が携わっています。それから市町村も携わっております。こういう関係上、碓氷製糸は株式会社としても日本の中でも最後に残された製糸会社の砦として位置づけていいのじゃないかなと思います。そういうところと前橋市農協は今も繭の取引をしているわけでございます。そういう関係上、これからも碓氷製糸さんには頑張っていただいて、我々のつくった繭を全量買っていただきたい、そういうふうに考えております。

そういうことで、幾らか明るい兆しも出てきたわけですが、提携システムに移ってから、碓氷製糸さんも四苦八苦していたのは手にとるようにわかります。というのは、我々養蚕農家は、掃立から自分の家でカイコを飼っているわけじゃないのです。１齢から３齢まで、人工飼料を使って、農協の飼育所で飼って、それで配蚕を受ける、そういう飼育の方法を

やっているわけです。そういうわけで、今は飼育所を使ってカイコを３齢まで飼ってもらうということです。

これに加えて、飼育所に対してのカイコの品種の量ですね。農協の飼育所ができた当時は、春蚕は２品種ぐらいで済んだわけです。そのため、掃立が午前中の朝早く、その種類は２種類とも同時に掃立ができた。しかし、養蚕が不景気になって、多品種を求められるようになり、消費者のニーズに応えるために多品種になってきました。そのために、今、飼育所が求められている掃立は、一日中かかります。午前中に３種類、午後に２種類とか、今、前橋市農協で飼われているカイコの品種は、多いときで５～６種類飼っています。そのような多品種を飼わなければならない。それに対応していかなければならない、これに対応できる飼育技術を持っている人、飼育に携わっている農協の担当者、こういう技術を持っている職員がどんどん減っています。今も現実に飼育所を切り回している技術者は、一旦農協を退職した人です。現職の農協の職員の中にはおそらく一人もいないのではないかなと思います。

それと、この飼育所の問題ですが、今、県内は、西では甘楽富岡、東では前橋市農協、この２カ所の飼育所で、県内はもとより、県外にも委託を受けて対応しているわけです。技術者の確保に今非常に神経を使っております。なかなか対象者を探し当てることができないのが現実ですが、これを何とかして解決したいのが、我々協議会会員が共通して持っている悩みの種でもあるわけです。今のところ、頑張ってやってくれている人がまだ来てくれているので、ひとまずは安心できるのですが、その後のことを考えると、頭を抱えるような状態になっているのが実際です。

それから、我々が農協の飼育所から配蚕された蚕をずっと飼ってきて、その繭を碓氷製糸さんに全量渡す。全量といっても、その中の一部は、今、隣におります西尾さんのところにも、わずかではありますが、渡っているわけです。そういう経緯を経ているわけでございますが、碓氷製糸さんには、これからもずっと頑張っていただかないと、我々協議会も本当に困ってしまうので、よく協議会の会議のあるときに出る言葉ですが、「我々養蚕農家がだめになるか、碓氷がだめになるか、どっちが先かな」。そんな言葉がよく出るのですよね。だけど、実際、そういう問題が差し迫っているのは間違いないのです。上では、県でも一生懸命努力をしていただいてはいるわけですが、養蚕農家の現場でも後継者が育たない。県は、その対策として、「ぐんま養蚕学校」を開校して、たとえ少しでも養蚕が行えるような人が出てきてくれればと養蚕学校を開校し、そこを卒業した生徒さんに助成

金を渡したり、あるいは実際の養蚕農家で研修をさせたりして、卒業して、今現在も何人かの人が実際に養蚕をやっております。そういう施策を講じて、その繭がほとんど碓氷製糸さんに行っていると思うのです。それだけ碓氷製糸さんは重要な要になっているわけなので、これからも頑張っていただきたいという期待は十分に持っておりますので、碓氷製糸さんにはよろしくお願いしたいと思います。

○藤井（コーディネータ）　ありがとうございました。

今のお三方のご意見を髙木さんはどのように受けとめられましたか。

○髙木（業績発表者）　改めて碓氷製糸が社会的存在になっているなということを強く感じまして、ぜひやっていきたいと思っています。

○藤井（コーディネータ）　それでは、話をもう少し深めていきたいと思います。

今日の本題になりますが、蚕糸業をめぐる現状・課題、そして新しい展開の可能性について、皆さんにご意見をお聞きします。髙木さんからまずお伺いしたい。髙木さんは、蚕糸業振興の最前線でさまざまな対策をとられてきた中心人物であります。そういう方が蚕糸業の現状に対してどのように思われているのか。可能性も含めてお話をいただけますか。

○髙木（業績発表者）　絹製品を使ってくれる人、あるいは量が減退していることが最大の課題で、やはりこれを何とか回復しなければいけないことだと思います。これは、私も30年前から、需要の確保といいますか、拡大というのは、いろいろ取り組んできて、しかも、なかなか十分な成果が上がらなかったことは十分に承知していますので、安易にこうすればいいというアイデアはなかなか出ないのですが、そうも言っていられませんので、やはり一つ一つ取り組まなければいかんと思います。

大前提として考えなければいけないのは、大量生産・大量消費の時代ではないということですね。それぞれ個人に合ったものが求められる時代ですから、大量消費・大量生産の、先ほども「一発ホームラン」と言いましたが、そういうことが実現できる時代ではないということ。

それから、製糸会社の社長になって改めて感じますのは、生糸は原料なのですね。最後の製品じゃないので、製糸会社として需要拡大をすることについては、非常に隔靴掻痒の感があります。ストレートに消費者に何かを訴えるという立場にいないという問題がありまして、これは、消費者と接する人、あるいは企業、この協力連携が絶対に必要だと感じています。

その消費者に直接接する人や企業が立てた商品企画、それに従って生糸を製造する。そ

してまた、それに必要な繭の品種を選択する。こういうふうに、結局は６次産業化という言葉なり、提携グループなりという言葉が当てはまることですが、これまでの製品を継続することも大事ですが、この際、新規商品開発をあれこれの面で、いろいろな面で、和装の面でも、洋装の面でも、その他の用途の面でも、この際やっていかなければいけないと思います。

そこで、先ほどの業績のときにもちょっと触れましたが、農林水産省で繭・生糸の需要創出ということを応援する事業がありますので、これを碓氷製糸が核になりまして、片や養蚕農家と組み、片や新商品開発をする関係の業者さんと組んで、いろいろな和装なり、洋装なり、その他の面で、あるいは下着とか、いろいろな面があると思いますが、新規商品開発に取り組むことを是非していかなければならないと思います。

それから、これまでの伝統的な需要に関して言えば、これも業績で触れましたが、小売り大手のやまとのような大きなところときちんと連携体制をつくっていくことと同時に、一つ一つの作家さんのような、量は少ないが、根強く絹を愛好してくれる方々ときめ細かくつき合うことを積み重ねることが大事かなと思います。

それからもう一つは、これは私の手にも余ることですが、大きな流れ、例えば、富岡製糸場が世界遺産に登録されたような大ヒットみたいなものが何か起こらないか。ちょっと触れましたが、オリンピックなどを契機に、何とか盛り上がる流れができないかなとは思っていますが、これもまた言うのは簡単で、実際にそういうものができるのは大変だろうと思います。

また、富岡製糸場の入場者数も減ってきましたが、もう一度、西繭倉庫の耐震工事ができたり、見学ができるようになったり、それから、県の世界遺産センターもできますし、富岡製糸場を核とした、もう一段の流れが生ずるような、そういう大きな企画ができればいいなと思っています。

当面のところはそういうことですが、いろいろな経営の合理化も図りまして、とにかく養蚕農家の皆さんに不安のないように経営の存続を図っていきたいと思っています。

○藤井（コーディネータ）　今、大枠について状況をお話しいただきました。その中で、消費者に働きかけるということがありました。しかし、消費者の絹に対する意識が変わらないと、なかなか今の時代に理解してもらい、商品を買ってくれる状態にまでいかないと思います。「富岡製糸場と絹産業遺産群」の世界遺産登録は、それを進めるための大きな後押しになっているのではないでしょうか。2004年に群馬県で世界遺産登録運動が始まっ

たとき以前であれば、本日のような「蚕糸業の新たな展開を目指して」という前向きなテーマ設定はあり得なかったのではないかと思います。それが、こうしたテーマ設定が成り立つというのは、大きな変化です。我々が感じている以上に絹に対する関心が高まっているのではないかなと思います。そうした、関心、意識の高まりをどのように生かすかは、土屋さん、群馬県にとっても大きな仕事だと思います。土屋さんは、行政の蚕糸業振興の最前線にいらっしゃる方ですから、いろいろな手立てを考えていと思います。お話をいただけますか。

○土屋（コメンテーター）　１つは、髙木社長からありましたように、碓氷製糸を核にして、いいチームをつくっていく。実際に、（株）やまとの話が出ましたが、この会場の後ろを見ていただくと、やまとの着物を今日のシンポジウムのために飾らせていただいています。今年の春、やまとのシンポジウムが桐生でありまして、群馬の養蚕農家がいて、碓氷製糸がいて、織り屋さんがいて、染め屋さんがいて、全部そろって「良質の連鎖」という言い方を矢嶋理事長がしており、今後は良質の連鎖によっていいものをつくっていきたいというお話がありました。県や行政が主催をしないでこのようなシンポジウムを開かれていること自体が、私はすばらしいことだなと思いながら会場で聞いていました。やはり理事長が言うように、蚕糸業振興の１つは、そういうものを一つ一つ積み上げていくことを県も一緒に応援していかなくてはならないと思っています。

それと、大きなヒットで世界遺産をという話があったのですが、日本を俯瞰しますと、群馬以外にも繭を生産している府県、11だったでしょうか、ありますし、山形県には松岡（株）という製糸工場もありますし、長野県でも国用製糸という国内向けの生糸をつくった製糸工場もあります。絹の産地も、茨城であったり、新潟であったり、京都であったり、加賀であったりで、まだまだありますので、もう一度、全国の絹の産地が一致団結して、日本の絹産業を守っていこうという取組みを、国庫事業を使って実施してはどうかと思います。また県立日本絹の里や全国のシルク博物館などをつないでシルクサミットというのが、業界でありますが、そういうものを含めて強化していく根ができればいいと思います。

また、国産生糸需要の主力となります和装の関係で、例えば、全国の都道府県なり、市町村で、着物を着ていったら「ぐーちょきパスポート」のように割引があるとか、全国でシルクを着る機会や話題にする機会を増やす取組みができればと思います。

○藤井（コーディネータ）　「富岡製糸場と絹産業遺産群」の世界遺産登録以後、新たに養蚕を始めた企業や個人はどれぐらいいらっしゃるのでしょう。また、今後、どのような

活動を期待しておられますか。

○土屋（コメンテーター）　「ぐんま養蚕学校」という言葉が途中出てきましたが、「富岡製糸場と絹産業遺産群」の世界遺産登録のときに、養蚕が再注目されるようになって、まさに流れが変わったなという動きがありました。それを受けて、平成28年から県蚕糸技術センターで、まずは養蚕のことを学ぶ座学という形で教えて、またその中で希望者は農家に通って実際の実習をやるという取組みをしています。３年間で座学には３４名が受講し、そのうちの１４名の方が農家研修をし、個人で７名の方が就農をし、１名の方が養蚕にかかわる企業に就職しました。

それとあわせて、民間企業の参入もあって、実際、富岡製糸場が世界遺産になった後に、21の企業ないし団体・個人が養蚕参入をしている状況です。

現在、今年度の繭生産を見ますと、この21の方々が県全体の繭生産のうちの21％を担う状況になっていますので、今後は規模自体の拡大であったり、更なる新規参入を期待しています。農福連携の中では、パーソルという大きな会社が養蚕参入する、画期的なことだと思います。以前は、全く考えもよらなかった企業や業界の方が養蚕参入をしている状況もありますので、県としてこれからも多種多様なあらゆるところからの養蚕参入を、個人、企業、団体を問わず進んでいけば、それを支援したいと思います。

○藤井（コーディネータ）　西尾さんも、蚕糸業をめぐる現状に対してはいろいろな思いがあると思います。西尾さんの率直なご意見をお聞かせください。

○西尾（コメンテーター）　先ほど松村さんのお話をお聞きしまして、養蚕農家の高齢化は待ったなしで進んでいる。農家のことが一番気がかりなことです。農家の戸数の減少も、一時ほどではないが、ひたひたと進んでいるという気がします。現在残っている農家に共通することは、皆さん本当に養蚕が好きで仕方がないという様子が伺えます。それは、カイコが生物で、その成長とその結果としての繭という完結した一つの事業であるからじゃないかと思います。今つくっている方たちの繭は、以前よりもいい繭ができているのじゃないかという思いがします。

また、農家の廃業というのが最大の課題であると思います。また、そのほかにも松村さんからご指摘がありましたが、その地域の養蚕の指導者というか、技師という方の存在が、これからますます考えなければいけないことになってくるように思います。

先ほど髙木さんから「糸は材料であるが」というお話がありました。私どもでつくっている糸、それが製品になってどのように反映されるかは大変難しいことで、どんな糸でも

ほとんど同じだろうと思えることもあります。ただ、先ほど供給しているといった染色作家たちは、少しでも、たとえ僅かでも、いいと思うものがあれば、それを選択していくという姿勢で制作されています。ですから、最終的には必ずいいものができていると思います。

私どもでつくり出している糸については、希望される方がまだいらっしゃるように思います。いろいろなお問い合わせもあります。しかし、それに応えられるだけのことが私にはできていません。仕事として取り組んでいるのではないので、なかなか時間的な、また、お金の面での余裕もないからです。以前であれば、私どもがお願いするような小口の扱いは、碓氷製糸ではしていただけなかったと思います。しかし、今後はさらに細かな対応が碓氷製糸には求められるかもしれません。株式会社となり、より柔軟で多角的な経営の展開が求められているのではないかと思います。

今日、本当にわずかな量となってしまった国産糸ですが、それだけに、とにかく高品質の生糸の生産を目指してほしいと思います。その一点だけにこだわった糸をつくってほしい。先ほど町井先生からお話がありましたように、イタリアやフランスのブランドの絹製品は、主にブラジルの糸が使われているとのことですが、それに負けない群馬の絹を売り込むことはできないだろうか。糸として世界に売り込むことができないだろうかと考えます。現在、純国産絹マークをつけた製品が一般にどれだけ認知されているかについて、疑問に思うこともあります。もし海外でメイド・イン・ジャパンの糸が使われていることになれば、その宣伝効果は計り知れないものがあるのではないかと思います。夢のような話かもしれませんが、過去、日本の絹を欧米に売り込んだ明治の先達たちのことを考えたときには、そんな努力も必要なのではないかと思います。

○藤井（コーディネータ）　ありがとうございました。良質な糸をつくること、それに対応できる体制が碓氷製糸には求められており、また、それらが整えられつつあると思います。

松村さんにお聞きします。昨年、ご自宅で遺伝子組換えカイコの飼育に取り組まれました。松村さんご自身、いろんな可能性があるとおっしゃっていましたが、どのような可能性を感じますか。

○松村（コメンテーター）　遺伝子組換えカイコ、英語で言う頭文字をとって「ＧＭカイコ」と呼んでおりますが、ＧＭカイコは、日本の言葉で言いますと、昔からよく言われている、「古きをたずねて新しきを知る」。ある書籍では『空想より科学へ』という書籍も

出ていますが、この２つのことばを代表して実現して見せてくれるのがＧＭカイコではないかなと思います。

ＧＭカイコといっても、遺伝子組換えのカイコですから、もちろんもとはカイコです。カイコを飼うわけですから、古いカイコを飼った昔の人が飼っても同じように飼えるわけです。ただ、飼う条件、飼う場所がいろいろな条件がついてくるというだけであって、養蚕農家が飼うのは、桑をくれて飼うわけですから、昔の人が飼っても飼える。昔の人が昔なりのカイコとして見ています。カイコそのものを見た限りでは、組換えカイコか一般のカイコか、全く見分けがつかないのです。そういう意味で、「古きをたずね新しきを知る」。これはまさにカイコの持てる技かな、そういうふうに思っています。そこへ人間の科学技術を１つ投入するだけでそれが実現できる。

カイコに関して我々人類は今まで、絹糸としての見方しかしてこなかった。カイコを飼って繭をつくらせ、その繭から生糸を取って織物にして、衣類やらいろいろな装飾品に使ってきたわけです。最初の頃はものすごく貴重品であって、正倉院に保存されるようなものしか使えなかった。そういう時代もあったように思います。

そういうものから、そうではなくて、我々が、もっと身近にシルクを見ることができる、触ることができる、それを実現させてくれるのがＧＭカイコです。このＧＭカイコは、糸として使うこともできます。それは、昨年、今年と話題をとりました、緑色に光るカイコです。そのほかにも医薬品とか、あるいは食料品、化粧品、あとは電子部品として使う基板の材料の一部として原料として使える、そういうことも農研機構さんでは研究を進めて、実現のところまでいっているものもあります。

そういうことで、ＧＭカイコ、これは、養蚕農家にとってものすごく夢が持てる、そういうカイコです。我々養蚕農家は、戦後ずっとカイコを飼えば、繭をつくれば、みんな買ってもらえる。かなりの金額で生活を潤してきた、そういう経緯があります。それが、中国の台頭によって、安い生糸、安い繭が入るようになって、激減してしまって、全く夢が見られなくなってしまった養蚕になってしまったわけです。そこに降って湧いたのが、2000年に世界に先駆けて作出してくれたＧＭカイコ。農研機構さんで、世界で初めてこのカイコをつくっていただいたわけで、その後、もう既に20年近くたちます。

私どもの前橋遺伝子組換えカイコ飼育組合は、この遺伝子組換えのカイコに飛びついたのが約10年前です。発足当時は６名の仲間がいましたが、今はみんな高齢化、あるいは体調を崩したりで、今はたった２名しかおりません。それでも何とか明るい光を目指して頑

張っております。もちろん、ここには農協の技術者、担当者、一般品種を飼育所で飼っていただいている技術者の協力も仰いでおります。

このカイコを飼うことによって、我々養蚕農家は、カイコを扱うのであるが、新しい夢、希望を持てるカイコであるのではないかなと、そのように考えております。昨年と今年、前橋市農協管内で２名の方が、ＧＭカイコ、緑色蛍光絹糸の品種を飼い、上々の成績を上げ、これだけの成績をおさめられるのなら、ほかの一般の農家でも十分飼えるな。そういう結論がとれるところまできております。

遺伝子組換えカイコは、今のところ、我々養蚕農家で飼って、桑をくれて飼うことができるのは、唯一蛍光絹糸という糸をとるのを目的にする組換えカイコです。それ以外の検査試薬だとか化粧品の原料に使うところでは、もう少し閉鎖系の飼育所の様な、そういう特別な施設を、空調システムの使える施設をつくらないと、しかも、大臣承認をとらないとなかなか飼育はできないのです。

でも、我々一般農家が飼える蛍光絹糸、これはまだ製品化はされていないのですが、実際に試作品等はできていると思うのです。昨年飼った繭は、京都の西陣の老舗のところにいって製品化されます。今年飼った繭は、大日本蚕糸会でも買っていただきました。そして、これからの製品開発の研究を進めていってもらっている段階です。

それから、もう一つは、元製薬会社だったのですが、その製薬会社の社長さんが、もともとは紡績会社を経営していたので、このカイコとのかかわりをいまだに持ってくれている。その会社がせっかくこれだけの糸をつくる組換えカイコができて、その糸ができるなら、うちでも何とか製品化しろ、そう社長に言われてきましたという部長さんが来て、そのような話をしていました。

そのように、まだ製品として世の中に出ていないのですが、かなり夢が持てるカイコ、これから、我々養蚕農家が期待できるカイコであることは間違いないと私は確信しております。この確信というのは、10年前から「前橋遺伝子組換えカイコ飼育組合」を立ち上げ、その後すぐに県蚕糸技術センターに行って、そのカイコの取扱いの仕方、それから、学科方面、法律的なこと、そういうこともいろいろ教えてもらいながら、冬の間通って、卒業証書ももらって、それで民間の委託のカイコ、本物の組換えカイコをセンターまで通って何回も飼ってきました。

もう名前も出ているので、ここで言いますが、農研機構さんと、徳島大学の医学部に難病の治療薬を研究している伊藤先生という人がいるのですが、そこの委託を受けて、カテ

プシンＡという難病の治療薬の原料として使うカイコ、それをセンターへ行って飼ってみました。

それから、あとは、検査試薬とか、コラーゲンタンパク、化粧品の原料ですね。こういう品種も飼ってきました。化粧品の原料は、今、藤岡に本社を置き、前橋にも会社を出してきて、空調システムをつくって、最新の設備でカイコを飼える工場をつくりました。免疫生物研究所というところですが、そこと我々も提携をして、毎年、化粧品の原料のコラーゲンタンパクをつくってくれるカイコを飼っています。来年年明けの１月末ごろからこの飼育に入ります。最近ですが、飼育所のホルマリン消毒等を全部済ませて、準備は整えております。

このカイコが我々にとっては救世主になるかな、そんな思いも抱いております。このカイコで碓氷製糸さんにも関係してくるわけです。というのはなぜかといいますと、遺伝子組換えのカイコの糸は、高温で繰糸することができないんです。中の色が薄くなったり、品質が変わることがあるので、低温で糸を挽かなければならない。日本中どこを回っても低温で糸を挽ける会社はなかなか見当たらなくて、唯一長野県の岡谷で１件だけあり、そこでセンターから繭を送っていただいて、そこで糸を挽いてもらっております。

話はちょっと変わりますが、県の議会で、群馬でつくった繭をなんで長野に糸を挽きに出すのだ。そう上層部から言われて、県も考えて、それじゃ、碓氷さんに助成金を使ってもらって、その装備をつくって、碓氷でつくってもらったらどうか、挽いてもらったらどうか、そういう話が具体的に出まして、その予算取りも農水省へ届けが行きまして、実際にその事業が始まっております。先ほど髙木さんの説明の中にもありましたように、その一部分が、古い繰糸機を取り払い、そこに低温で糸が挽ける機械装備を設置する、それがその事業の動きです。

来年の３月ごろにはそれが稼働するのではないか。そういう話も先ほど出ましたが、いよいよＧＭカイコも群馬で全て処理ができる、そういう時代が来ている。本当にすぐそこまで来ている時期にきました。

そういう研究が、我々はカイコを飼うだけですが、10年前からセンターへ行って、いろいろ技術を教わり習得してきて、それがもうじきに実を結ぶかな、そんな期待も私は持っております。

○藤井（コーディネータ）　松村さん、熱いお話ありがとうございます。お話を聞いていると、今まで全くなかった発想で蚕糸業の可能性を捉えられている。それをほかでもない

養蚕農家を50年続け、大変なご苦労をされてきた松村さんがおっしゃるわけですから、非常に説得力を感じるお話でした。

今の話の中で出てきた、2000年にＧＭカイコを開発された農研機構に昨年までお勤めになっていた町井さんに、ＧＭカイコの開発について、また、ＧＭカイコの可能性、未来の蚕糸業について、お考えをお聞かせください。

○町井（コメンテーター）　今、松村さんから、詳しい組換えカイコ、あるいは組換えシルクについてお話ししていただきまして、私からそれほど申すことはないのですが、技術的な成果として大きく発展するきっかけとなったのは、2000年に初めて組換えカイコが作出されて数年後には、シルク繊維を構成しているフィブロインとその周りを覆っているのり状のセリシンという２つのタンパク質のそれぞれの層に融合タンパクとして別のタンパク質を発現することができるようになったことです。

2000年の時点では、導入した遺伝子は組織のどこでも発現していました。これを絹糸腺という組織に特異的に発現させることが、わずか数年でできるようになった。絹糸腺はタンパク質をつくる器官です。フィブロインとの融合タンパクを発現させることができれば、今までにない組換えシルクができます。

また、セリシンは水に溶けやすい性質がありますので、セリシン層は医薬品や検査用試薬などのタンパク質の発現に向いています。骨粗鬆症の検査薬や、アルツハイマー病の検査薬など、既に実用化されています。

組換えシルクについては、農研機構で出来るだけ早く農家の方々に組換えカイコを飼っていただける日がくることを願って取り組んできました。遺伝子組換えカイコを扱うにはカルタヘナ法という法的な規制をクリアする必要がありますので、多少時間がかかりましたが、昨年から組換えシルク、特に緑色のＧＦＰシルクを農家で飼育することができるようになりました。

今後は、緑色のＧＦＰシルクのほかに、赤やオレンジ色など蛍光色を発するシルクも出てくる予定です。それから、超極細で1.5デニール以下の極めて細い糸をつくるものを組換えカイコも出来ていますので、これも農家レベルで飼育できるように進められています。

最近、新しい技術として、新聞なんかでもよく出ているので、皆さんも目にされたことはあるかもしれませんが、「ゲノム編集」という新しい技術ができております。これを使うと、例えば、フィブロインの遺伝子を抑えて、フィブロインのかわりに別のタンパク質を発現させる。あるいはセリシンの発現を抑えて、セリシンのかわりに別のタンパク質を

つくらせる、こういうことができる時代がきつつあります。カイコの世界も今後ますます変わっていくと思います。400ミリグラムのタンパク質をつくれるカイコですので、産業レベルから見ても、非常に可能性のある技術ではないかなと思っております。

もう一つは、組換え技術に限らず、普通のシルクでもそうですが、成形加工を施す技術もどんどん進んでおります。生活用の資材とか、あるいは工業用の資材とか、こういった方面にシルクを活用していくことも可能になりつつあり、いろいろな分野の民間企業の方に関心を持っていただいております。蚕糸業の今後への期待という意味では非常に大きいものがあると思っているところです。

○藤井（コーディネータ）　ありがとうございました。

群馬県は、以前から長年にわたって絹産業の振興に取り組んできたのですが、ここ何年かはその本気度が非常に強まっていると思います。土屋さん、最後に、今のＧＭカイコも含めた蚕糸業振興の可能性について、お話をいただければと思います。

○土屋（コメンテーター）　大河ドラマにもなりましたが、群馬県が誕生したその時に、楫取素彦県令がこの群馬県に赴任してから、そして、今日この瞬間まで、群馬県としては一貫して蚕糸業振興をして参りました。私も担当する課長となって、このことを心に置いて仕事をしたいと思っております。

話題になりました遺伝子組換えカイコの実用化では、有用物質生産の取組みの中で、全齢の人工飼料育の研究が必要になります。そのため、今年度の９月補正で、群馬町にある、カイコの餌をつくる稚蚕人工飼料センターの機能強化をするため、生産性革命に資する地方創生拠点整備交付金という国の事業を使いまして、24年ぶりの全面改修に２年間をかけて取組んでいくことになっております。

私はこの仕事をしていて思うのですが、近代における先人達は、明治期の富岡製糸場、大正期の多条機や一代交雑種、昭和期の自動繰糸機、そして人工飼料という形で、常に世界の先端を行く技術革新を続けてきました。遺伝子組換えカイコの取組みは、平成の技術革新であると思っています。

「富岡製糸場と絹産業遺産群」は、世界との交流と技術革新が世界に認められて世界遺産になりましたが、この取組みというのは、明治、大正、昭和、そして平成までも続いていると私は思っています。今このときに、明治の先人たちが富岡製糸場をつくった思い、大正の思い、昭和の思い、これらの思いを引き継いで、平成以降、養蚕農家のために碓氷製糸とともに両輪として蚕糸業振興に取組みたいなと思います。今日、松村さんの話を聞

いて、熱い情熱を感じましたので、私たちもその熱き情熱に負けないように、明治から150年続く先人たちの思いを胸に、新しい時代の蚕糸業振興ができればと思っております。

まとまりませんが、そんな思いで、これからまた蚕糸業振興に取組みたいと思いますので、会場の皆様、そしてパネラーの皆様にも一緒に取組んでいただければと思います。

○藤井（コーディネータ）　ありがとうございました。

会場には蚕糸・絹業の専門家の皆さんがおそろいです。大日本蚕糸会の小林会頭がおいでですので、パネルディカッションの感想とご意見をお願いします。

○小林会頭　大日本蚕糸会会頭の小林と申します。

今日はこういったところでお話をくださいまして、ありがとうございました。私ども大日本蚕糸会でやっている仕事との絡みで、幾つかお話をさせてもらえればと思います。

碓氷製糸が天皇杯をいただいたわけであります。そのとき、評価につきまして町井さんからお話がありました。私の理解では、いろいろな評価の中で、特に川上、川下が連携した蚕糸・絹業の６次産業化と、いわゆる提携グループをつくって、その中核として活躍いただいたと、これを評価されたのじゃないかと理解しておりまして、引き続き、蚕糸会としてもそういった事業の支援を進めているわけでありますが、提携の形を深めていく、これがこれからポイントであろうと考えております。

なぜかといいますと、結局、需要開拓ということですよね。これだけの日本の大きな蚕糸業が輸出産業の一番のトップだった時代から、今年は110ｔ、国産の繭の生産高でありました。こういった形で流れてきたところの一番の大きな需要は、特に、輸入品との関係とか、ほかの人造絹糸等との競争だったのですが、そういった流れの中で、需要ということを考えていくことがポイントであります。

特に、先ほど西尾さんのお話でしたか、要するに、品質というお話がありました。純国産絹製品のマークをつけてやるという事業を進めていますが、これは、おそらく始まった頃は、日本製品だからということが証明される。それから、町井さんが言っておられたトレーサビリティですね。それが評価されたのだったと思うのですが、今や国産だからどこにいいところがあるのかがないと、これは消費者なりユーザーの人には受けないことがはっきりしまして、そういう意味で、機能とか特別の品質を訴えていける、国産だからというのではなくて、国産のこういうところがいいのだということをやっていく、そこを深めていきたいなと。

そうなりますと、髙木さんのところでありました多品種少量生産という流れでしょうね。

特色ある品質とか、特色あるつくり方をとらまえて、それにブランド化していくという流れを進めていくことだろうと思います。

その中で、遺伝子組換えですが、遺伝子組換えも、松村さんおっしゃるような形でいろいろ課題があります。技術面、糸を繰る面とか、それに加えて、私ども、何に使うのだと。最終製品のところのブランド化、マーケティング、ここをあわせてやっていきたいということで、ちょうど農林水産省の補助金が出て地域振興をやっているのですが、その中の柱として、提携グループのような形の商品開発、これも整備していきたいと考えているところでございます。そういうことで進めておりますので、皆様方にも蚕糸会の事業にご協力をお願いしたいと思います。

１つ、群馬県の皆様、大勢いらっしゃるので、お願いと期待ですが、富岡製糸場、せっかくの財産ですから、ぜひお客さんに多く来ていただく算段をやっていただきたい。今、インバウンド3,000万人になりました。そういう意味で、土屋さんは中国の駐在経験もおありなので、インバウンド対策も含めた取組みをお願いしたいと思っています。

以上であります。どうもありがとうございました。

○藤井（コーディネータ）　ありがとうございました。

皆さんから大変幅広く深いお話をいただきました。他の皆さんからももっとお話を聞きたいのですが、終了予定の時間がきてしまいました。

蚕糸業をめぐる環境というのは、依然として厳しさが続いていますが、ここ何十年間か見えなかった光明が見えてきたことを実感いたしました。会場の皆さんもそういう大きな可能性を感じられたのではないかと思います。パネリストの皆さん、非常に内容の濃いお話をありがとうございました。また、会場の皆さん、ご清聴どうもありがとうございました。（拍手）

○司会　演壇の皆様、長時間にわたりまして、有意義な意見交換ありがとうございました。また、会場の皆様も熱心にお聞きいただきまして、まことにありがとうございます。

以上をもちまして、「明治150年記念シンポジウム」を終了いたします。

お帰りの際には、簡単なアンケート用紙をお配りしていますので、ご記入の上、受付にお渡しいただくようお願いを申し上げます。

また、参考までにパンフレットをお配りして、年明けに今年度の天皇杯受賞に係るシンポジウムを、受賞者の地元２カ所、三重県と岩手県で開催することを予定しております。お近くに関係者がおられましたら、お声がけなどしていただければ幸いでございます。

それでは、以上で閉会といたします。

本日はまことにありがとうございました。（拍手）

平成３０年度（第５７回）農林水産祭

「明治１５０年記念シンポジウム」

（蚕糸業の新たな展開を目指して）

発　　行　平成３１年３月

編集・発行　公益財団法人　日本農林漁業振興会

〒１０７－００５２

東京都港区赤坂 1－9－13　三会堂ビル７階

TEL　（０３）－６４４１－０７９１（代）

FAX　（０３）－６４４１－０７９２

URL　http：//www.affskk.jp

本資料に掲載の記事、写真の無断転載を禁じます。